324
324-12

承陽大師聖教全集

第壹卷

永平寺刊行

明治
40 4 28
内交

MISSING
PAGE(S)
WERE
NOT
FILMED

孝明天皇御宸翰　國師號御宣旨　永平寺所藏

敬吉祥山永平寺開基道元禪師本出華胄便入
桑門直體照空感表父母之師一葉航海遠求佛
祖之道禪慧圓滿辭披震旦之雲身心脫落師
我日出之邦觀有為法普濟萬物以無礙之見
悟衆生創興巨於城南開吉祥於北越玄化偏
覆芳聲遠播九重延想萬里契誠仰門所
貴武夫銷勇盛哉妙機大哉道德爾來欽都
綿閱永平六百星霜磬香芬之薰馥宸服
天風緬懷厥人豈無敬號宜諡佛性傳東國師

嘉永七年二月廿四日

今上天皇陛下御宣旨　大師號御宣下　永平寺所藏

諡　承陽大師

佛性傳東國師

太政官　從一位　勲一等　三條實美奉

明治十年十一月廿二日

小川一眞製版

今上天皇陛下御宸翰 承陽殿 御勅額 永平寺所藏

承陽

小川一眞製版

承陽大師自畫自賛肖像　永平寺所藏

小川一眞製版

甑身活命[illegible]人人滿
口是道[illegible]答他[illegible]答自[illegible]問僧
[illegible]問自[illegible]如口嚼道[illegible]口嚼道
[illegible]口嚼枝[illegible]若答他時口上更
開壹隻口[illegible]若不答他違他所問
[illegible]違自所問[illegible]
[illegible]答西來意[illegible]一切[illegible]佛祖[illegible]上
樹口嚼樹枝[illegible]時節[illegible]答
來意[illegible]問西來意[illegible]一切[illegible]佛祖
[illegible]上樹口嚼樹枝[illegible]時節[illegible]
[illegible]答來意[illegible]雪竇明覺
禪師重顯和尚云樹上道即易樹

下道即難若僧上樹也致將一問來
[illegible]致將一問來[illegible]盡力來[illegible]
[illegible]問[illegible]
[illegible]答[illegible]問來[illegible]
[illegible]古今[illegible]古錐[illegible]香嚴
[illegible]大笑[illegible]樹上道[illegible]樹
下道[illegible]答西來意[illegible]不答
西來意[illegible]試道看

正法眼藏西來意第六十二
爾時寛元二年甲辰二月四日在越
宇深山裏示衆

小川一眞製版

凡例

一　大師一代の言教。出家人に示されたるあり。在家人に示されたるあり。又出家在家に共通して示されたるあり。然れとも本書一一に之を分類せす。何となれは大師唱道の宗旨は一以て之を貫く。具眼者幸に之を二三にすること莫かれ。

一　大師唱道の宗旨。もと言詮の外に在り。言詮は魚兎を得るの筌蹄に過きず。故に一代の言教曾て推敲彫琢せられしことなし。文章詩賦歌詠の往々常軌に合せさるが如きものあるは。却て是れ大師本來の面目なり。不立文字教外別傳。直指人心見性成佛。後賢乞ふ之を會せよ。

一　普勸坐禪儀は。もと永平廣錄の中に編入しあり。然るに本書之を廣錄より削除して。特に卷首に載錄したるは。大師弘教傳道最初の垂訓にして。亦大師一代言教の標榜綱維なればなり。

一　普勸坐禪儀。學道用心集。正法眼藏。永平清規は。啻に當時の參學

者に示されたるのみにあらす。亦後昆に遺訓せられしなり。而して爾餘の言教は。大概一時の垂訓にして。侍者之を筆錄したるものとす。參究者乞ふ之を辨せよ。

一　正法眼藏。正法眼藏隨聞記。光明藏三昧等の流布本は。中古以還片假名を用ゐあるも。本書は總て之を平假名に改め。又普勸坐禪儀以下漢文の垂誨には。悉く之に句讀を施し。且正法眼藏の鼇頭なる諸本異同の對照に就きては。特に本文に符圈を施したり。是れ皆な讀者の便に供するの微衷より出づ。

一　本書收錄の外に。永平語錄雋原。永平家訓。永平頌古。永平正宗訓。永平正宗訣。永平假名法語。永平業識圖なるものあり。其の雋原家訓及頌古は。永平廣錄を拔萃したるものにして。其の正宗訓。及ひ正宗訣は。正法眼藏。及ひ正法眼藏隨聞記を拔萃したるものなり。故に本書之を錄せす。其の假名法語。及ひ業識圖は。古來大師の垂誨にあらさるの說あり。予亦是の如く之を信す。故に本書之を錄せす。

一　坐禪箴はもと正法眼藏に在り。而して永平廣錄に重載す。故に本書は之を廣錄より刪除す。

一　寶慶記。傘松道詠。正法眼藏隨聞記。光明藏三昧。曹洞教會修證義等を附錄としたる事由は。後記解題の下に附言す。幸に照亮を望む。

一　初發心の學道者にして。本書に依り大師の宗旨を參究せんと欲するときは。修證義。學道用心集。普勸坐禪儀。及正法眼藏の辨道話等を精細に領會し。然る後爾餘の垂訓を研鑽するを順序なりとす。然れとも法もと難易なし。難易は其の根機に在り。故に一片の婆言。切に取捨を望む。

一　解題の末尾に附記する注釋書は。只編者の見聞する所を揭ぐ。恐くは尙ほ他に存在すへきなり。而して是等の書。絕版或は寫本に屬し。方今極めて獲難きもの多かるへきも。特に讀者の參

考に供せんか爲めに。之を掲くるのみ。

明治四十一年九月二十八日　　編者謹識

附　言

本書の刊行に就き。東京大龍寺孝道和尚。武藏藥師寺玄光和尚は。深く此の擧を隨喜し。大師に恩海の一滴を酬ゐん爲め。校讐其の他刊行の業に盡瘁する所あり。編者偏に其の芳志を謝し。一言以て之を附記す。

凡例終

承陽大師聖教全集目次

普勸坐禪儀……第一卷
正法眼藏（自辨道話卷至畫餅卷）……第一卷
正法眼藏（自全機卷至八大人覺卷）……第二卷
學道用心集……第三卷
永平清規……第三卷
永平廣錄……第三卷
寶慶記……第三卷
傘松道詠……第三卷
正法眼藏隨聞記……第三卷
光明藏三昧……第三卷
曹洞教會修證義……第三卷

承陽大師聖教全集目次終

承陽大師聖教全集第一卷目次

普勸坐禪儀……一
正法眼藏辨道話……五
正法眼藏摩訶般若波羅蜜……三四
正法眼藏現成公案……三八
正法眼藏一顆明珠……四四
正法眼藏重雲堂式……五一
正法眼藏卽心是佛……五七
正法眼藏洗淨……六三
正法眼藏禮拜得髓……七七
正法眼藏谿聲山色……九五
正法眼藏諸惡莫作……一〇九
正法眼藏有時……一二一
正法眼藏袈裟功德……一三〇

正法眼藏傳衣……一六一
正法眼藏山水經……一八六
正法眼藏佛祖……二〇二
正法眼藏嗣書……二〇六
正法眼藏法華轉法華……二二二
正法眼藏心不可得……二三六
正法眼藏心不可得……二四二
正法眼藏古鏡……二五八
正法眼藏看經……二八一
正法眼藏佛性……二九五
正法眼藏行佛威儀……三三〇
正法眼藏佛教……三五一
正法眼藏神通……三六五
正法眼藏大悟……三七七

正法眼藏坐禪箴……三八六
正法眼藏佛向上事……四〇三
正法眼藏恁麼……四一四
正法眼藏行持……四二六
正法眼藏海印三昧……四九一
正法眼藏授記……五〇〇
正法眼藏觀音……五一三
正法眼藏阿羅漢……五二二
正法眼藏栢樹子……五二七
正法眼藏光明……五三四
正法眼藏身心學道……五四二
正法眼藏夢中說夢……五五二
正法眼藏道得……五六〇
正法眼藏畫餅……五六七

承陽大師聖教全集第一卷目次終

承陽大師小傳

日本曹洞宗の開祖。教主釋迦牟尼世尊第五十一世の正嫡。越前永平寺開山。敕諡佛性傳東國師承陽大師は。諱は道元。希玄と號し。俗姓は源氏。村上天皇九世の孫なり。父は內大臣右近衛大將東宮大傅贈從一位久我通親公。母は攝政太政大臣從一位基房公の女藤原氏。大師胎に在すこと十有三月。土御門天皇正治二年正月二日京都に降誕したまへり。時に天香馥郁として瑞光室を照らす。其胎に在るや。一日空中に聲あり告げて曰はく。貴孕は是れ五百年來の大聖にして。正法を日本に弘通する爲め降臨托胎すと。生るゝに及び博士之を相して曰はく。七處平滿にして骨相奇秀なり。眼に重瞳ありて至聖の虞舜に齊し。必ず常人に非ずと。建仁二年大師年三歲十月二十日嚴父通親公薨去せらる。是より仲兄大納言通具公。大師を鞠養し。鍾愛備に至る。建仁三年大師年四歲。祖母の膝上に在りて。唐人李巨山の詩集なる李嶠雜詠を讀みたまひ。建永元年大師年七歲。周詩一篇

を賦して育父通具公に呈し。又毛詩及ひ春秋左氏傳を讀みて。畧其の義に通じたまふ。是れより後一切の文字は其義趣を了じ復た師訓を待たず。承元元年大師年八歳。是の冬慈母藤原氏薨去せらる。悲哀措く所を知らず。斯くて弔葬を高雄寺に修行せしに。大師龕前に跪きて拈香揖拜し。香烟の裊々として上り。篆籀の幻影乍にして生じ乍にして滅するを熟視して。深く諸行無常の理致を感悟し。乃ち出家求道の志を決定したまふ。是より先慈母の命終に臨みたまふや。大師を枕頭に招き。丁寧に訓誡して曰はく。吾が亡き後には必ず剃髪染衣して。佛法を修行し。逝きたる父母の冥福を資け。兼ねては四生六道の業苦を救ひたまふべしと。大師既に慈母を喪ひたまひ。悲哀痛哭の間。耿々たる念頭其の遺訓を忘れたまふこと能はず。一片の菩提心。龕前の香烟に觸れて。忽ち發露決定したまひしなり。承元二年大師年九歳。此の春より世親菩薩の俱舍論を閲し。晝夜精を勵まして修學したまふ。人の其の旨を問ふものあれは。辯拆流るゝ

が如し。耆年宿德も其の穎異に歎服し。擬するに文殊の化身を以てし。眞個大乘の道器と稱せり。此の時に當り大師の外叔なる。前攝政關白藤原師家公。齡既に不惑にして嗣なかりしかは。深く意を大師に屬し養ひて子と爲したり。蓋し芝蘭玉樹を庭階に栽培し。祖先の緒業を紹繼し。皇家輔弼の棟梁に任へしめんと冀圖せられしなり。是を以て公は深く大師を愛育し。時に親ら相家の庭訓を授け。或は國家の政要を敎へられしかど。大師は心頗る之を厭ひたまひて。出塵の念益々深し。建暦二年大師年已に十有三歳。養父師家公將に大師に加冠し。顯要の職に奏薦せんと思はれ。其期方に定り。補任の職亦將に決せんとせり。蓋し當時の公卿は。大概閥族家例を以て補任せられ。敢て年齒の長幼を問はざるを以てなり。大師竊に之を聞き。自ら忖度したまはく。塵累漸く纏綿して。益々出離を罪礙す。苟も相家の冢嗣にして。朝廷の卿輔に補せらるゝときは。遽に世を遁れ家を出づべからず。假令幸にして志を遂ぐるも。頗る皇家の恩眷に辜

負し。而して又累を家門に及す。其の罪誠に鮮少ならずと。是に於いてか遂に其の志を決したまひ。一夜更闌に人定まりて後。肅然として乃父乃母の寢室に向かひ。多年愛育慈撫の劬勞を禮謝し。一掬無限の感涙を袖にし。自ら憶念したまはく。流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩入無爲。眞實報恩者と。竟に遁れて家を出てたまへり。時に春月微雲に曇められ。花影幽徑に徘徊し。香風脈々として。輕寒衣襟を襲ふ。既にして四明の山麓に達し。外叔良觀法眼の禪室を叩きたまふ。法眼は基房公の子師家公の弟。大師が生母の兄にして。叡山の上綱。顯密の先達なり。是の時法眼驚き迎へて其の所由を問ひたまひしかば。大師具に其の志を告げたまへり。法眼其の加冠の期近くして。補任の將に決せんとすることを思ひ。且つ阿兄の驚歎と親戚の愛惜とを顧慮し。深く素志の翻回を慫慂したまひしに。大師固く拒みてのたまはく。慈母逝去の時遺誡して。吾が亡き後には。必ず剃髮染衣して佛法を修行し。逝きたる父母の冥福を資け。兼ては四生六道の

業苦を救ふべしとのたまひしかば。我も亦是くの如くせんと思ひ。徒らに俗塵に交らんことを願はざれば。唯〻出家せんと思ふと。堅く執つて動きたまはざりしかば。法眼覺えず感涙を垂れて。竟に其の入室を許したまひ。尋いて横川首楞嚴院の般若谷の千光房に留學せしめられき。其の翌建保元年大師年十四歳。四月九日。天台の座主公圓僧正に就きて薙髮し。其の明十日。公圓僧正より菩薩の大戒を稟承し比丘となりたまふ。座主公圓僧正は顯密無比の碩學にして。淨業持律の高德なりき。是より先師家公は大師の遁世を拒み。其の入道を許さゞりしが。良觀法眼中に居て斡旋し。遂に大師の素志を達せしめられたり。蓋し佛制に父母の許さゝるものは。具戒得度することを得ず。大師の薙髮受具の荏苒したるは則ち此を以てなり。大師千光坊に留學ましましてより。日夜山門の教觀を學び。又南天の秘教を習ひたまひ。茲に既に三回の葛裘を更て。三學兩乘の研鑽日も亦足らざるが如くして。傍又一切藏經をも閲覽したまひし

に。頓て一塊の大疑團。其の胸宇の間に薈結し來れり。大疑團とは則ち顯密の二教に於いて俱に談ずる所の。本來本法性。天然自性身の那一著なり。若し自己の身心にして。本來に法性を存在し。天然に佛身なりとせば。三世の諸佛は何の故に發心出家して。無上正等正覺を願求したまふかと。便ち之を山門の碩學耆德に歷參質義したまひしかども。遂に之が理致の指教を受けたまふことを得ず。時に大師は偶〻三井寺の公胤僧正の觀心に明かなることを聞き。就いて之に質したまふ。公胤僧正答へて曰はく。子が疑點は我宗堂奧の玄談にして。傳教慈覺の兩大師より。累代口訣を以て傳承し來れり。然れども甚だ之を說くに苦しむ。遙かに聞く西天の達磨大師東土に來り。方に佛印を傳持せられしより。今其の宗風天下に布けり。名けて禪宗といふ。若し此の事を決擇せんと思はば。速かに建仁寺に赴き榮西禪師の室に入りて其の故實を問ひたまふべしと。公胤僧正は顯密二教に精通し。當時佛法補處の菩薩と稱せられたる人なり。

大師其の教を聞きて大いに悅び。徑に建仁寺に詣りて榮西禪師に謁し。便ち問ひて曰はく。本來本法性。天然自性身。什麼としてか三世の諸佛は發心成道するや。禪師曰はく。三世の諸佛は有ることを知らす。狸奴白牯は却つて有ることを知ると。大師深く其教示を服膺したまひ。是より留りて禪師に常侍し。佛祖嫡傳の正宗に歸入して。復四明に歸りたまはず。建保三年榮西禪師入寂したまふ。是より大師は其の嗣明全和尙に師事して。日夜臨濟の宗旨を參叩し。又傍律藏を習ひ。兼ねて止觀の蘊底を究め。重ねて菩薩の大戒を受け。刀耕火種佛法を修證したまふこと前後九年。此の間榮西禪師の宋國より齎したまへる五千餘卷の大藏經を閱覽せられしこと二回。而して大凡顯密心の三宗の正脈は。悉く稟承して。明全和尙の嫡嗣と爲りたまへり。然れとも佛祖單傳の大道なる正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門に於いては。尙未だ自證したまふこと能はず。貞應二年大師年二十四。是れより先入宋求法の大願を發したまひしが。

是に於て一切の僧具を整備し。後堀川天皇の宣旨を得て。是の歳二月二十四日其の師明全和尚と俱に京師を發し。三月筑前の博多に達し。商船に駕し。萬里の蒼溟に入りたまふ。船中疫癘に罹りて頗る煩悶せられたりしも、日ならずして癒え。四月初旬浙江省慶元府に着したまへり。時に南宋寧宗皇帝の嘉定十六年なり。大師尚舟中に在して。時々上陸し諸方の寺院を歴觀し。名匠碩學を討尋したまひぬ。五月四日阿育王山の典座舟に抵りて椹を購ふ。因に大師相見したまひて。數番の問話あり。典座は有道の尊宿にして大事に飽參す。大師服膺したまふ。五月十三日。大師初めて浙江省慶元府太白山天童景德寺に詣り。無際了派禪師に謁せしに。禪師一見して深く器重し提撕甚だ懇懃なり。因つて其輪下に止住したまふ。天童山は宋朝五山の一刹にして。厚く朝廷の外護を受け。香積の資財甚だ豐饒にして。衆徒常に千人に下らず。而して無際禪師は當時の宗匠なれば。明全和尚も亦禪師に參じて。大師と俱に掛錫せられたり。蓋し大師及び明全和尚の天童に登りたまひしは。先師榮西禪師の昔日茲に留錫したまひし舊蹤を追ひたまひしなり。此の時綱維は大師及ひ明全和尚を新戒の位次に排列せり。其の意遠方邊國の人といふを以て。之を輕賤侮蔑したるなり。凡そ禪林の常軌に。一會衆僧の僧籍なるものあり。則ち受戒先後の年臘に依りて。其の階級位次を設定し。坐作進退の序列を制するものにて。是れを僧臘戒次と謂ふ。即ち佛祖の洪範なり。大師之を見て其の非法を慨きたまひ。竊に綱維に忠言して之を改めしめんとせられしも。聽かず。是に於いて大師は其の佛祖の洪範に反するとを明示し。屢〻之が矯正を懲懲したまひしに。一山の耆宿皆之を拒み。且曰はく。唐朝以還日本より來れる所の最澄空海乃至榮西等も。中華の叢林に入るときは皆必ず新戒に列せり。是中華叢林の例規なり。是を以て今や遽に之を改め難しと。爰に於いて大師竊に佛祖洪範の紊亂するを痛歎したまひ。必ず之を矯正せんと欲し。乃ち之を寧宗皇帝に訴へたまふ。其の上表の

畧に曰く佛西天に興りて毘尼を以て洪範と爲す法東域に流へて僧臘を序で階差を分つ前古依り繇ふ今に至りて何ぞ廢せん伏して以れば皇朝聖喆にして宸慈溥通す靈山の囑言を忘れずして漢廷の奉行せんことを願ふ恩を垂れて僧次を正したまはば受戒の先後愆りなからん旨を頒ちて亂階を治めたまはば法歳の短長以て別つべし外客幸に天澤に沐すること得ん下情野詞を悉さずと此の表一たび上りたまひしも朝議因循して省せず是に於いてか大師再び上表したまへり其の畧に曰はく重ねて白す佛法沙界に遍くして戒光十方を照らす況や經に曰はく今此三界は皆是我が有なり其の中の衆生は皆是吾が有なり吾有を以て言ふときは此の娑婆世界は釋迦牟尼佛の國土なり國已に佛國なれば人皆佛子なり兄弟は天倫にして混淆すべからず伏して以れば佛法世法理のまゝに之從ふ天神地祇は非理を容さず理にして或は違せざるときは恐らくは是れ亂邦ならん賢者は亂邦に居らず眞人は奸慝を避く佛家の臘次にして若し的當ならずんは王室の憲綱は安ぞ明晰とせんや幸に中華の聖德を仰ぎ爰に倭僧の鄙懷を陳ぶ天裁胡ぞ私あらん謹みて乞ふ戒次を正したまへと寧宗皇帝親ら其の表を覽て大いに之に感動し遂に天童山に敕して如法に僧臘の序次を格定せしめたり天童多年僧臘亂次の弊是に於いてか矯正することを得而して諸方の叢林も風を聞きて僧臘の亂弊を釐正し爭ふて佛祖の洪範に復せり是れより後本朝の僧侶漢土に入りて諸方の叢林に掛錫するときは皆法臘に依りて階次せられ復扞屈せらるゝことなし是の月曩きの阿育王山の典座大師の天童に在すを知り特に登山して大師に相見し祖道の玄機を敲唱して去る蓋し育王の典座が大師の天童に在すを知りしは鄮の僧臘釐正の偉擧の阿育王山に傳聞したるに依るなるべし阿育王山は天童山を距ること僅に三十里許なれはなり嘉定十七年大師年二十五日本の元仁元年なり天童の留錫既に二歳是より先屢〻無際禪師の

印可を得たまひしと雖も。大師自ら之を肯ひたまはず。此の秋錫を轉じて徑山に詣り。浙翁如琰禪師に參見したまふ。大師如琰と機々相契はず。去つて台州に至り。盤山思卓禪師を小翠巖に訪はる。大師思卓と亦機々相契はず。爾來諸方の名山巨刹を遍歷し。碩德耆老を參叩したまふ。天台の雁山。平田の萬年。慶元の護聖寺を歷訪したまひしも。此の際の事なりき。又阿育王山に至り大光和尚に參じたまひしが。之を肯ひたまはず。且つ其の門下にも人なきを歎きたまひき。大師は斯く諸方の叢林を歷參したまひしも。謂はゆる碩德耆老なるもの。箇々阿轆々地。頭腦相似て。一も其の意に滿るものなし。依て再び天童に詣り無際禪師に師事せんと欲せられしに。偶〻禪師の遷寂せしを聞き。大いに嗟嘆したまひ。宋土淹留の爲す所なきを悟り。竊かに歸朝の志を決し。將に天童に至り明全和尚に告別したまはんとて。途中徑山に登り。羅漢堂を拜せんとせられしに。忽ち一老僧あり。風采神異。眼光人を射る。大師に告げて曰はく。老兄萬里遠く來り。切に大法を求む。撥草瞻風所得なきには非ず。然れとも人天の導師一代の宗匠は。長翁如淨其の人なり。頃日勅請に應じて。天童に晋院せられき。老兄若し初志を償はんと欲せは。當に往いて之に參すべしと。大師之を聞き大いに歡喜作禮し。其の名を問ひたまへば。曰はく予は此間に住する老璡なりと。言ひ訖つて見えず。蓋し此の異僧は羅漢尊者の化現なりといふ。寶慶元年大師年二十六。日本の嘉祿元年なり。五月一日再び大白山天童景德禪寺に掛錫し。初めて長翁如淨禪師を妙高臺に燒香禮拜したまふ。淨祖初めて大師を見たまふ。淨祖指授面授するに曰はく佛々祖々面授の法門現成せりと。淨祖又曰はく。昨夜洞山悟本大師を迎ふるを夢みたり。恐らくは子は大師の再生ならん。他日我が宗子に依りて大に世に興らんと。蓋し洞山悟本大師は。釋迦牟尼佛第三十九世の正嫡。支那に於ける我宗中興の祖師なりとす。大師淨祖に參見したまひしより。天童の僧堂裏にましまして。寒暑を忘れ寢食を忘れ其の脇曾て席に着

かず。孜々汲々日を以て夜に繼ぎ。只管面壁して打坐し。佛祖の大道を參究したまひ。而して朝參暮請も亦曾て廢したまはず。其の此の事に於いて暫時も放過せられざることは。恰も頭上に將に墜ちんとする巖石を戴き。脚下に萬仞の懸崖を履むに齊しく。求道の心念至切熾くが如く。參究の功業日に益々成熟す。淨祖或る時後夜の坐禪に入堂し。大衆の睡眠するを嚴誡して曰はく。參禪は須らく身心脫落なるべし。只管打睡して什麼を爲すにか堪へんと。大師傍に於いて豁然として大悟し。直ちに方丈に上りて燒香したまふ。淨祖問ひて曰はく。燒香の事作麼生。大師曰はく身心脫落し來る。淨祖曰はく。身心脫落。脫落身心。大師曰はく這箇は是れ暫時の伎倆。和尚亂に某甲を印すること莫れと。淨祖曰はく脫落身心。大師禮拜したまふ。時に福州の廣平侍者傍に在りて曰はく。外國人恁麼地なることを得たり。實に細事に非ずと。淨祖曰はく此中幾くか拳頭を喫し。脫落雍容し又霹靂すと。是歲九月十八日。大師淨祖より佛祖正傳の大戒を稟承したまふ。即ち菩薩の大戒なり。今日我等大師兒孫。及ひ宗門の檀越信徒の稟受し行持する所の大戒は即ち是なり。大師道業既に成熟して。德風人に薰ず。淨祖偶〻大師に請ひて侍者たらんことを求め。告げて曰はく。元子外國の人なりと雖も。道眼圓明にして。智德既に備り。一會の衆僧企及するものなし。依て侍者に請すと。禮至り辭盡す。大師固く之を辭しての たまはく。不肖幸に其の知遇を辱なうす。感荷曷そ堪へん。敢て恩命に服するときは。日夜左右に奉侍し芝蘭の薰化を蒙り。其の法益の多きことは。まことに遡り知るべからず。中心實に之を切望すと雖も。一會の衆中に。若し其の人あるときは。不肖身を容るるに地なく。慚恐慚惶の至りに堪へず。而して或は一會の衆中に。縱ひ其の人なしとするも。外國の小人。叨に巨刹の要司に膺る。啻に巨刹の名聲を汚すのみにあらず。亦た大宋に其の人の乏しきを暴露するが如し。亦惶懼の至りに堪へず。冀はくは別人を以て之に補したまへと。淨祖其の至言に服し。敢て之を强ひ

たまはざりし。是より先。理宗皇帝深く大師の盛德を敬慕して。畫宗李龍眠の絶筆なる十六羅漢尊者の畫像を贈りたまふ。蓋し御庫の秘寶なり。李樞密、陳參政。王觀察。溥侍郎。王員外。陳觀察等の諸宰官より。文秀才茹秀才以下數十名の居士は。深く大師に歸向して。其の化益に浴せり。大師或る時昌國縣の補陀洛迦山に詣り。大悲弘誓の觀音淨聖を禮拜したまふ。因みに偈あり曰はく。聞思修入三摩地。自己端嚴現聖顏。爲告來人明此意。觀音不在補陀山。蓋し箇々面前の觀自在。人々一座の補陀山なることを亟示したまふなり。大師或時江西に行化し曠野を過ぎて。劇甚の急症に罹りたまひしが。醫療致すに由なくして已に九死に瀕したまふ。侍者道正看護に力を盡せしと雖も。遂に回起の色なし。時に白衣の神嫗あり。化現して藥を授けしかば。道正之を大師に捧げて服せしめけるに。病忽ちにして癒ゆ。道正大いに喜び。嫗に謝し且名を問ふ。嫗の曰はく。吾は日本の稻荷神なり。元公求法の大願に感し。常に隨つて擁護し奉れり。今や事頗る急なり。故に聊救濟し奉ると言訖つて見えず。道正歸朝の後。其の報謝として稻荷祠を其の邸に創建して之を祀る。今其の祠宇京都道正町に在り。大師一日行化の因み。神童あり道傍に化現す。大師に告げて曰はく。聖者道業既に熟す。宜しく速かに日東に歸錫し。大法を弘通して。以て人天を化益すべしと。大師之を異とし其の名を問ひたまひしかば。對へて曰はく吾は韋將軍なりと。亦言訖つて見えず。蓋し韋馱尊天なり。今日全國の宗門寺院に於いて必ず庫堂に鎭安し奉るもの是れなり。大師の韋馱尊天より歸朝の慫慂を受けたまふや。初めて度生時緣の漸く熟するを悟られ。淨祖に丈室に謁し。燒香禮拜して罔極法乳の慈恩を感謝し。告暇歸東の旨を陳べたまへり。淨祖强ひて留むべきにあらざれは。遂に之を聽許したまふ。尋いて侍者に命じて。道場を嚴飾せしめ。大師を召し。其の本師より傳承したる芙蓉楷祖の袈裟。寶鏡三昧。五位顯訣。並びに自賛の頂相を授け。告げて曰はく。汝は異域の人なるを以て。之を授けて大法嗣承の

信を表するなり。國に歸りて大法を宣布し。廣く人天を利濟すべし。又城邑聚落に住することなかれ。一箇半箇を接得し。吾が宗をして斷絶せしむることなかれと。大師感泣拜謝して。遂に淨祖に訣別したまふ。日本の商船偶々慶元に繫泊し。艤裝して將に纜を解かんとす。其の期明日に在り。此の夕偶佛果圜悟禪師の碧巖錄を道友の許に瞥見したまふ。題して佛果碧巖破關擊節と謂ふ。直ちに其の一二紙を披見したまひしに。其の拈提評唱。渾金璞玉にして。氣格超邁。韻致奔逸。卷を措くこと能はず。乃ち乞ひて之を借り。室に歸りて謄寫したまふに。夜色深沈として漏聲屢〻移り。更既に闌ならんとして。卷帙未だ半に達せず。大師憂心忡々。乘槎の期已に明日に迫りて。而して事其の志と違はんとす。忽ち白衣の神人化現して。孜々之を助筆し。鷄鳴の頃。謄寫の業全く卒る。大師深く神人に謝し。且其の姓名を問ひたまひしに。神人曰はく吾は是れ日本の白山神なりと。言訖つて忽ち滅す。是れ今日世に嘖々たる所の碧巖錄にして。此の時大

師に依りて。始めて我國に傳りたるなり。此の寫本は世に之を一夜碧巖と稱して。現に加賀の國金澤の大乘寺室中に秘藏し。而して祖筆と神筆と墨痕筆蹟明かに分てり。蓋し白山權現は。佛法守護の大統領にして。大師常に念持したまひ。入宋上程の時にも特に祈誓したまひし神明なりとす。明日大師天童山を拜辭し。舟に上り江を下りたまふ。舟招寶山下を過ぐ。忽ち一神人あり。舳に現ず。冕冠盛裝右手を額に捧げ。大師に告げて曰はく。予は是れ大權修理菩薩なり。師今佛心印を單傳して本國に歸りたまふ。予隨從入朝し以て大法を擁護し奉つると。言訖つて見えず。今全國宗門の寺院に必ず鎭安する所の大權菩薩是なり。已にして大師の舟大洋に出づ。水天一色。渺として際涯なく。太陽の出沒を見て。僅に東西の方向を知るのみ。一日黑雲天の一方より起り。漸く大空に彌蔓す。舟子色を失なふ。既にして颶風忽ちに起り。暴雨大いに至る。怒濤狂瀾洶湧澎湃し。一扁の孤舟は。已に將に覆沒せんとすること數回。滿船皆叫喚悲慟し。各々

死を待つが如し。大師蓬窓に在り默然として端坐し。少頃時を移したまひしに。忽ちにして觀世音菩薩は一片の蓮葩に駕し。大師の舟頭に出現したまふ。須臾にして。風雨徐に收り。波濤漸く平かにして。扁舟遂に危難を免るゝを得たり。大乘妙典觀音普門品に。衆生困厄せられ。無量の苦身に逼るに。觀音の妙智力は。能く世間の苦を救ひ。神通力を具足して。廣く智方便を修し。十方諸の國土に。刹として身を現ぜずといふことなし。或は巨海に漂ひ流れ。龍魚諸の危難あらんに。彼の觀音の力を念すれば。波浪も沒すること能はずと。蓋し是れ之を謂ふなり。是れより兩三日にして。舟肥後の國の河尻に達しぬ。大師觀音淨聖の危難を救ひたまひしを感謝し。親ら海上に於て拜せられし淨聖の尊像を彫鐫し。之を河尻の寺院に安置したまふ。今の南溟山觀音寺是なり。其の淨聖は俗に南溟觀音の稱あり。既にして陸路京都に歸錫し。建仁寺に止住したまふ。四方道俗大師の歸朝を聞き。參見聞法するもの日に月に多きを加ふ。爰に於て大師普勸坐禪儀一篇を撰述して。普く坐禪を勸めたまふ。蓋し此の書の撰述は。實に大師の我が國に於ける弘教傳道の起點にして。又宗門の根基なりとす。寛喜元年山城國宇治郡深草の里なる。安養院と名くる廢院に遷られ。諸佛諸祖の勝躅を履みて。日夜只管に打坐したまふ。而して大師の聖德は何人の唱道する所なきも。自然に四方に暄傳し。人敢て其の名を稱せずして。唯深草の佛法房の聖人と謂へり。桃李言はず其の下自ら蹊を成す。諸宗の高僧より王侯將相士庶民に至るまで。次第に弟子の禮を執て參見聞法せり。爰に於いてか。辨道話の垂訓あり。是れ正に寛喜三年中秋の日にして。四方來集の緇素何れも。歡喜讃仰せざるはなかりき。已にして大師は度生機緣の純熟することを觀察したまひ。同しく深草の里なる極樂寺の舊趾に就き。一寺の建立を發願したまひ。天福元年の春。之に移錫したまひ。名けて觀音導利院と云ふ。是の歲日本曹洞宗の第二祖孤雲懷奘禪師。大師に參見して衣を更へ歸投せらる。嘉禎元年冬法堂及ひ

僧堂の建立を企圖したまひしに。其の事四方に聞え。遠近力を戮せ道俗子の如く來りて。金穀布帛委積山を成し。其の翌二年四月僧堂竣工し。尋いて正覺禪尼法堂を造立し。藤原敎家法座を喜捨し。其の他殿堂門廡厨庫三門浴室東司皆落成す。即ち命名して觀音導利院興聖寶林寺と稱す。十月十五日大師始めて祝國開堂の大禮を擧行したまふ。祝國開堂とは。宗門最大の典禮にして。則ち法莚を法堂に公開し。今上陛下の聖壽萬歲を祝禱し。且つ其の嗣承の恩師を表白し。以て佛祖の聖敎を擧揚するなり。又隨從の僧衆と夏冬の結制安居を修行したまひ。其の他日用百般の行事より。乃至一切の規矩法度等。總べて佛祖の戒律制範に遵由し。一も異なる所なし。四條天皇特思を以て興聖寶林禪寺の敕額を下し賜ひ。又神明來りて聽戒し布薩毎に參見す。亦以て當時の敎化を知るべきなり。蓋し我が朝に佛敎の宣傳弘布せしより以來。住持の三寶に於いて。眞實の佛制に依據したるは。正しく此の時に權輿せり。而して今日所謂禪宗と稱するものゝ。我國に公許せられて。弘敎傳道したるも。亦正しく此の時に權輿せしなり。是の歲十二月除夕。其の高弟懷奘禪師をして乘拂せしめらる。乘拂とは乘塵の義にして。塵尾を乘りて學人を接化する謂なり。是より先天福元年に觀音導利院則ち興聖寺に移りたまひしより。京洛の間に於いて。篤信檀越の懇請に應じ。拄杖說法したまひしこと一百餘回。受菩薩戒の弟子二千餘人に及ぶ。相摸國鎌倉淨土宗光明寺開山良忠上人。紀伊國由良臨濟宗興國寺開山法燈國師を初めとし。其の他諸宗の名匠碩學の參學問法せしは。大抵此の際なりき。又二祖孤雲懷奘禪師を始めとし。僧海詮慧の二禪師。及ひ三祖徹通義介寒巖義尹其の他義演義準等他の諸禪師の他宗より歸投し。衣を更めて弟子となり。參禪辨道せられしも亦此の際なりき。寛元元年七月解制の翌日。院事を義準和尙に統べしめ。二祖孤雲禪師以下の徒弟を率ゐ。飄然として去つて越前に行化したまふ。檀越波多野義重吉峰の古精舍を修して之に請し。尋いて志比の莊

内に伽藍の經營を計れり。此の時大師は又禪師峰に往き。開教化導に從事したまひしが。翌寛元二年七月伽藍經營稍成るを以て。十八日進院せられ。命名して傘松峰大佛寺と謂ふ。即日祝國開堂の法要を修行したまふ。一に興聖の儀の如し。九月一日法堂落成し。僧堂又竣工す。十一月一日傘松峰を改めて吉祥山と稱し。寛元四年六月十五日。大佛寺を改めて永平寺と稱す。大師上堂說法したまひ曰はく。

天有道以高淸、地有道以厚寧。人有道以安穩。所以世尊降生。一手指天、一手指地。周行七步曰。天上天下、唯我獨尊。世尊有道。雖是恁麼。永平有道。大家證明。良久くして云はく。天上天下。當處永平と。是れ大師の寺號を命せられたる垂訓にして。亦大師の衆生を化益し。國家を擁護する本願を宣說したまひたるなり。此の時に當り。大師の化儀都鄙遠近に霑被し。法式說法の修行せらるゝ毎に。參拜聞法の信徒。常に一千人を下らず。又四方の學徒は。風を聽きて麕至し。日夜參禪辨道に汲々たり。其の化門の隆盛なること。古來其の比を見ず。寶治元年七月。鎌倉の執權北條時賴特使を永平寺に遣し。自ら弟子の禮を取り。切に關東人民の化導を懇請す。大師其の志を嘉して之を許され。八月鎌倉に着したまふ。時賴大いに悅び。迎へて自邸に館し。禮待甚だ渥し。尋いて菩薩の大戒を受け。入道して法號を請ふ。大師乃ち道崇と名けたまふ。蓋し其偏諱を與へたまひたるなり。是より時賴朝夕伺候聞法し。懶躬勉勵して參禪學道す。大師懇切丁寧に佛祖單傳の大道を訓誨し。其の蘊底を盡くしたまはざることなし。一日時賴の教外別傳の請問に答て。あら磯の波もえよせぬ高岩にかきもつくべきのりならばこそ」と示したまひしが如き。亦接化の一端を窺ふに足る。又大師一日從容として。深く因果應報の理致を敎示し。政柄を解きて之を朝廷に奉還すべきことを慫慂したまふ。時賴大いに感悟せしかども。當時の事情。遂に之を斷ずること能はざりし。而して此時還政の訓誡を垂れたまひしことは。後世武將の間に言ひ傳へしものにして。此より一百三十四年を經て。北朝永德元年九月

廿五日。臨濟宗天龍寺の義堂和尚。足利義滿の爲めに首楞嚴經疏の六根證入の章を講せしに。義滿密談天下の政事に及び。義堂に告げて曰はく。萬一變あらば。天下を棄てんと欲す。當に永平長老の平氏を勸めたるが如くすべしと。義堂密に之を贊して曰はく。世を視ること弊屣の如くなれば。是則ち安樂長久の基なりと。平氏とは北條時賴を謂ふなり。而して大師の鎌倉に在すや。四方の道俗風を聞て子來し。受戒聞法するもの數百千人。化益關東に霑被す。時賴欽仰措くこと能はず。依つて新に土木を興し。莊大の伽藍を經營し。固く大師の止住を請ひしかど。大師之を峻拒したまひしかば。後時賴宋僧道隆蘭溪禪師を請して。之に住持たらしめたり。今の建長寺即ち是なり。翌寶治二年二月下旬。大師鎌倉を辭し。三月十三日。永平寺に歸錫したまふ。時賴追慕已まず。大師の隨徒玄明の山に歸るに依托し。越前六條の地三千貫を寄附して。香積の資糧に供せんとしたり。玄明寄附狀を帶びて山に歸り。大に衆僧に慶耀し。尋いて大師に稟せしに。大師大いに玄明を叱責して曰はく。陋し這の漢。一片の利心。八識田の中に落つ。恰も油の麪に入るか如く。永劫にも擯すべからず。亦恐らくは辱を大法に貽さんとて。即ち急に其の被する所の法衣を褫奪し。之を擯斥して直ちに下山せしめ。又其の曾て坐せし所の僧堂の單を撤去し。又其の牀下の土を鑿除せしむること七尺に及べり。蓋し穢を去るなり。而して大師は遂に時賴の寄附を受けたまはざりき。寛元三年四月十五日結夏。大師上堂して說法したまひしに。其の前後に於いて天華繽紛として亂墜せり。輪下の衆僧參拜の道俗。皆其の希有殊勝なるを瞻仰せざるものなし。是れ諸天善神の大師の聖敎宣揚を尊重讃歎し。恭敬供養し奉るなり。寛元五年正月十五日。大師布薩を修行し說戒したまひしに。其の時五色の彩雲ありて。丈室當面の紙障に靉靆せり。是れ諸佛菩薩諸天善神の影向來現しましまして。大師の化儀を隨喜讃歎したまひしなり。參見の道俗深く其の希有殊勝なることを感動し。起請文を認めて後鑒に供

へ置けり。又寶治二年四月より。十一月十二日に至るまて。永平寺僧堂の內外に於いて。時々に殊勝なる異香馥郁す。是れ諸天善神の大師の化益を尊重し讃歎し。恭敬し供養し奉るなり。寶治三年正月元日。大師永平寺に於いて羅漢尊者の大供養會を修行したまひしに。教主釋尊の影像を始めとして。十六大阿羅漢尊者の木像及ひ畫像悉く皆大光明を放ちたまへり。是れ教主釋尊及ひ十六大阿羅漢尊者の。相互に影向來現したまひしなり。輪下の僧衆。參拜の道俗。皆俱に其の希有勝妙なるに感喜仰歎せり。大光明は之れを瑞華と謂ひ。俗に之れを毫光と謂ふ。而して此の日禮拜供養したまひし木像は。常に方丈に安置し奉られしものにして。其の畫像は。大師在宋中に理宗皇帝より贈られし。李龍眠の絶技に成りたるものとす。而して大師此の日の祥瑞を記してまた後鑒に供へたまへり。其の記文及ひ李龍眠の畫きし羅漢の尊像は。今現に常陸國牛久金龍寺に襲藏せり。又建長三年正月五日夜半に。大師子院の靈山院庵室に在して。

花山院入道宰相及び其の他の道俗を接化したまふ。時に神鐘の靈響あり。乍ちにして斷へ。乍ちにして續き。縹渺隱約の間に傳ふること。幾んと二百杵許り。唯大師と入道宰相のみ之を聞き。他は之を聞くこと能はざりしなり。是れ亦諸天善神の大師の化儀を尊重讃歎し。恭敬し供養し奉りしなり。建長二年後嵯峨上皇深く大師の德風を欣仰したまひ。敕使を永平寺に遣はし。大師に紫衣及び佛法禪師の徽號を勅賜したまふ。大師固く謝辭して之を受けられさりしかは。敕使已むを得ずして歸京し。闕に伏して之を奏す。上皇嗟嘆之を久しうし。重て宣旨を降したまふ。恩を謝せらるゝに偈あり曰はく。「永平雖谷淺。勅命重重々。徘徊猿鶴笑。紫衣一老翁」。後入朝して天皇及ひ上皇に謁し。深く聖恩の洪大を感謝したまふ。而して紫衣は遂に高閣に藏め置きて。一生之を被着したまはす。徽號も亦自ら之を稱せられしことなし。是歲波多野義重一切藏經を謄寫して。永平寺の經藏に納む。此に於いて住持の三寶。始めて具備せり。建長五年大師

年五十四。是より先き。心竊かに示滅の時機を豫定せられて。最後教訓の八大人覺を編述したまひ。是歳正月六日。輪下の遺弟及び宿縁の道俗を集めて。諄々之を教誡したまふ。是れ教主釋尊遺教の貽範に依りたまひしなり。七月十四日。大師永平寺の法席を二祖孤雲懷奘禪師に讓り。以て大法の擧揚を付囑したまひ。又自ら裁縫せられたる袈裟を以て之に傳附したまひしかは。波多野義重以下宿縁の道俗。始めて大師の疾の已に重きことを知り。憂悶措くこと能はず。切に京師に入りて靜養せられんことを請ひ。哀求數回に至る。大師豫め自ら入滅を期したまひしと雖も。義重以下孝心の至切なるを嘉し。八月五日山を下り。道途恙なく京師に入らせられ。高辻西洞院なる俗弟子覺念の家に投じたまふ。其の懇請に應じたまひしなり。後嵯峨上皇之を聞し召し。特に勅使及び醫官を遣はし。慰問診候せしめたまふ。此の月十五日中秋。一天雲なくして拭ふか如く。明月高く懸り。清光澄澈し。頗る其の幽懷に愜はせられ。乃ち筆すさびたまひしに。「また見んとおもひし時の秋だにも今宵の月にねられやはする」。又或る日室内を經行したまひ。低聲に誦して曰はく。若於園中。若於林中。若於樹下。若於僧房。若白衣舍。若在殿堂。若山谷曠野。是中皆應起塔供養。所以者何。當知是處即是道場。諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提。諸佛於此轉於法輪。諸佛於此而般涅槃。と。乃ち親ら筆を執りて之を柱に記したまひ。又此の室を妙法華蓮經菴と題名したまふ。則ち諸佛を供養し奉らるゝ爲めに塔廟を起立したまふの意なり。大師の京師に入りたまひしより。貴顯親族及び結縁の緇素。參見慰問。大概虛日なかりしが。大師從容機に隨つて接化し。誡勸最も勤めたまひたり。是の月二十八日夜半。沐浴して衣を整へ。偈を書して曰はく。五十四年。照第一天。打箇跟跳。觸破大千。咦。渾身無覓。活陷黃泉。筆を投じて入滅したまふ。二祖孤雲禪師以下。嗣法及び剃度の隨徒。其の他親族乃至義重覺念等の道俗。皆哀痛悲慟し。殆ど人事を辨ぜざるに至るものあり。龕を留むること三日。神色生けるか如し。異香馥

郁として室に滿つ。閣維し舍利を得ること算なし。九月六日。孤雲禪師親ら靈骨を奉じ。遺弟以下結緣の道俗を率ゐて。京師を發し。十日永平寺に歸龕し。十二日如法に入涅槃の盛禮を修行し。恭敬供養し奉られしこと前古比なし。尋いて寺の西北隅に塔して。靈骨を封壙し奉り。塔を承陽と謂ふ。今の承陽殿是れなり。是れより先。大師の訃音天闕に達しければ。上皇震悼ましまして。特に勅使を下し弔慰したまひ。都鄙遠近。大師の教化に浴するものと浴せざるものとに論なく。皆其の人滅を聞きて。哀痛悲歎せざるはなかりし。大師世壽五十有四。法臘四十有一。其の嗣孤雲懷奘僧海。詮慧及び法明の四神足あり。孤雲の嗣義介寂圓義演義準佛僧及び道存の六龍象あり。義介の嗣太祖弘德圓明國師等あり。其の後法子法孫天下に蔕衍して。一萬四千の門末は全國に碁布し。壹千餘萬の檀信徒は海內に彌淪す。嗟乎亦盛なる哉。大師滅後六百二年を經て。嘉永七年二月二十四日。先帝孝明天皇特に勅書を永平寺に下したまひ。大師に佛性傳東國

師の諡號を贈りたまふ。又二十五年を經て。明治十二年十一月二十二日今上天皇陛下深く大師の聖德を軫念ましまして。更に承陽大師の徽號を加賜したまひ。又二十四年を經て。明治三十五年五月三日。大師六百五十年遠忌の豫修法會に際し。更に承陽の勅額を廟前に賜ふ。

承陽大師小傳終

解題

普勸坐禪儀解題

大師撰述の坐禪儀二篇あり。一は假名文にして。正法眼藏九十五篇の一に屬す。一は漢文にして載せて。廣錄第八卷の末尾に在り。斯篇卽ち是れなり。全篇七百五十六字に過ぎずと雖も。大師宋より歸朝の年卽ち嘉祿三年(安貞改元)に撰述せられたるものにして。弘教傳道最初の垂訓にして。亦一代言教の標榜綱維なり。大師が坐禪を以て佛道の正門となし。普く打坐を勸めたまひし理由は。正法眼藏開卷に載する所の辨道話に詳かなるが。大師は。上智下愚を論ぜず。利人鈍者を簡ばず。齊しく參禪せしめんが爲めに。斯篇を作りて。坐禪の儀則を示したまひたるものなり。蓋し大師入宋の當時。佛祖の道大に衰廢し。宗風揚がらざりしかば。正法眼藏坐禪箴に。

現在大宋國の諸山に。叩刹の主人とあるもの。坐禪をしらず。學せざるおほし。あきらめしれるありといへども。ずくなし。諸寺にも

とより坐禪の時節さだまれり。住持より。諸僧ともに。坐禪するを本分とせり。學者を勸誘するにも。坐禪をすゝむ。しかあれども。しれる住持人はまれなり。このゆゑに古來より近代にいたるまで。坐禪銘を記せる老宿一兩位あり。坐禪儀を記せる老宿一兩位あり。坐禪箴を記せる老宿一兩位あるなかに。坐禪銘ともにとるべきところなし。坐禪儀いまだその行履にくらし。坐禪をしらず坐禪を單傳せざるともがらの記せるところなり。

と慨歎せられしことなれば。ましして我が國にては。從來入唐の諸師坐禪を傳へたる者ありと雖も。眞箇佛祖正傳の坐禪を傳へたる者は。未だ之れあらざるが如し。是故に大師は歸朝開敎の初めに當りて。斯篇を作り。以て正傳の坐禪を擧揚せられたるなり。無住禪師の雜談集に。

建仁寺の本願(榮西)入唐して。禪門戒律の儀を傳へられしかど。只狹牀にて。事々しき坐禪の儀は無かりけり。國の風儀にまかせて。天台眞言など相並べて。一向に禪院の儀式は行はざりしに。時至りて。佛法房の上人。深草にて。大唐の如く廣牀の坐禪を始めて行はれたり。

とあり。大師も亦自ら「西來祖道我傳東」と表白せられしことあり。卽ち我國に於ける佛祖正傳の坐禪は。實に斯篇に依て始めて實行せられたることを知るべし。寶曆年中に。面山和尙が。廣錄中より之を拔き別本として刊行せられたるにより。廣宣流布するに至りたり。

注釋

一　普勸坐禪儀不能語　木版一册　指月和尙著

大師滅後五百〇四年。寶曆六年に指月和尙。大師の坐禪箴と共に。漢文を以て詳密に拈評注解を加へられたるものにして。斯篇を參究するには最良の指針とす。寶曆九年に師の資。本光和尙序を附して出版せられ。明治十二年龍童和尙首書傍解を加へて出版せり。

一　普勸坐禪儀聞解　　木版一冊　面山和尚著

寶曆七年に師の提唱せられしを。侍者慧苗和尚の筆記して刊行したるものなり。

一　獅乳　　活版一冊　悟由禪師垂示

明治廿八年に。禪師が篤信居士數輩の爲めに垂示せられしを。侍者靈峰和尚が筆記せしものにして。解説頗る懇切なり。

○　正法眼藏解題

第一撰述　正法眼藏九十五卷は。人皇八十五代後堀川天皇の寛喜三年より。八十八代後深草天皇の建長五年に至るまで。卽ち大師三十二歲より。五十四歲に至るまで。二十三年の間に於ける。安養院。興聖寺。六波羅密寺。波多野義重幕營。吉峰寺。禪師峰。永平寺等の七ヶ處の說法にして。大師親ら撰述したまひし所なり。正法眼藏といふ標題。及び一卷の篇目に就いては。古來異說ありと雖も。皆臆想に過ぎず。永平寺寶庫中に大師親筆の「祖師西來意」の卷あり。其の奧書に「正法眼藏西來意第六十二爾時寛元二年甲辰二月四日在越宇深山裡示衆」とあり。又二世懷奘禪師の眞筆にして。三世徹通禪師の傍書せられたる「佛性」の卷あり。始めに「正法眼藏佛性」と題し。奧書に「正法眼藏佛性第三仁治二年辛丑十月十四日記于觀音導利興聖寶林寺同四年癸卯正月十九日書寫之懷奘」とあり。其の次に徹通禪師は「爾時仁治二年辛丑十月十四日在雍州觀音導利興聖寶林寺示衆再治御本之奧書也正嘉二年戊午四月廿五日以再治御本校合了」と記せられたり。之に由りて是れを觀れば。斯書の標題は正しく大師の自唱せられしものにして。決して後人の安じたるものにあらざることは明かなり。

第二編集　斯書の編集に二種あり。一は懷奘禪師編集の七十五帖。一は大師の曾孫義雲禪師編集の六十卷是れなり。前者は建長七年。卽ち大師滅後三年に。懷奘禪師。大師の草本に就て書寫し。自ら列次

輯錄せられたるものなるか。五十餘年を經て。延慶の頃。永平寺回祿の因みに燒失せりといふ。後者は嘉曆四年。卽ち大師滅後七十七年に。義雲禪師は灰燼の中より出でたる正法眼藏を拾拾して六十卷を完結し。而して每卷に著語を附し。又題號の頌を述作せられたるものなり。

第三謄寫　大師滅後五十一年。乾元二年の頃。經豪和尙。懷奘禪師編集七十五帖を謄寫して。每卷に抄を作らる。手澤の正本。現に豐後州東國東郡橫手村泉福寺開山無着和尙(大師七世の法孫)の影室に秘在す。世に之を「經豪本」。又は「影室本」。或は「七十五帖」とも稱す。今本書の上層に單に「影室」又は「福本」と畧稱す。次に大師滅後百三十餘年を經て。後龜山天皇元中の頃。永平寺九世宋吾禪師は。寶庫に秘藏せる義雲禪師編集の六十卷を謄寫して副本に備へられたり。世に「宋吾本」と稱するもの是れなり。次に大師滅後百六十七年を經て。應永二十六年に。梵淸和尙加州佛陀寺に在りて。大乘寺寶庫に秘藏せる徹通禪師所持の寫本。卽ち懷奘禪師編集の七十五帖を謄寫し。更に散逸せる九卷を拾拾して八十四卷とせられたり。世に之を「梵淸本」と稱す。今本書の上層に「淸本」と畧稱す。次に大師滅後四百三十八年を經て。元祿年中。永平寺三十五世晃全禪師。梵淸本の八十四卷を寫し。更に寶庫の古寫本の中より八十四卷以外の八卷を得。又別に辨道話。重雲堂式。示庫院文の三卷を得。九十五卷と爲して。永平寺に收藏せられたり。是れ現今刊行して世に流布する所の正法眼藏の原本なりとす。

第四刊行　斯書の世間に流布せんことを護惜せんが爲めなるか。大師滅後四百七十四年を經たる享保十二年に時の僧統關三刹は。幕府の同意を得て「永平正法眼藏全部又は一部分の拔萃たりとも。寺院並に書肆に於て出版することを停止す」との宗令を發したりしかば。安永元年越前福井藩主歸依の僧某。斯書を刊行せんと欲し。藩主の贊成を得て。永平寺に照會したるに。同寺四十七世堂元禪師

は。曩きの僧統の宗令に據て之を拒絶したり。大師滅後五百四十三年。寛政七年に。五十世玄透禪師。僧統に謀り。翌年十一月幕府の許可を得。十二月僧統より開版允許のことを宗令せしめ。同時に穩達。俊量の二師に刊行の幹事を命ぜられたれば。二師は十方有縁の喜捨を募り。辛苦經營中。文化元年に至り。俊量和尚遷化せられ。竣功愈〻荏苒し。文化八年の春に至り。卽ち十六年の星霜を經て。始めて全部二十一卷の彫刻の竣成を告げ。刊版を永平寺承陽殿に納め。同年七月末派寺院僧侶に彫刻竣功せるを以つて。有志は永平寺に就て拜請すべきことを宗令せり。而して未だ文字の校正を了せざるに。文化十年に穩達和尚も亦遷化せしを以て。永平寺は更に透關和尚に命して校正せしめ。同暦十二年始めて校正を了畢し。四百部を印刷して拜請者の需めに應じたりといふ。されば現今永平寺所藏の木版は。寛政八年に開版に着手せしより。此に至るまで二十年を經過し。永平寺は五十世玄透禪師。五十一世慧源禪師。五十二世宣峰禪師五十三世爲戒禪師の四代を經て始めて成れるものなり。以つて當時書籍刊行の辛苦艱難を知るべきなり。

注釋

大師滅後凡そ五百年間は。啻に斯書を講ずる者無きのみならず。謄寫する者も亦多からず。間〻慕道篤志の法孫にして。「宋吾本」若くは「梵清本」を拜寫する者あるも。唯秘書として之を尊重し。深く筐底に藏むるに止まりしもの〻如くなりしが。元祿年中に至り。卍山和尚之を唱道せられ。尋で天桂。面山の二師。大いに之を發揮せらるゝに及んで。宗内の僧侶競ふて之を謄寫し。又參究するに至りたり。今その注釋書を擧ぐれば。凡そ左の如し。

一　正法眼藏抄　活版二册　經豪和尚著

斯書は經豪和尚が乾元二年四月十五日より。延慶元年十二月廿二日に至るまで。六ヶ年の星霜を費して。其の師詮慧和尚が。大師の提唱を記錄せられたる「御聽書」十卷に據りて。懷奘禪師編集の

七十五帖の註抄三十卷を撰述せられたるものなり。世に「經豪抄」といふ。此抄本は。詮慧和尚の開創なる京都永興寺に傳はりしが。長慶天皇建德の頃。無着和尚。戰亂を避け。永興寺を去るに臨み。その紛失を恐れて。之を嚢中に納め。豐後國泉福寺に到られしが。和尚遷化の後。其の影室に秘藏して世に示さず。故に世に之を「影室」と云ふ。又「御聽書」に對して「御抄」とも稱す。是れ正法眼藏を注釋せる最古のものにして。懷奘禪師編集の七十五帖の大意を參究するには。最良の書なり。明治三十六年十一月。現住普界和尚「正法眼藏抄」と題して活版に附し二冊となして東京鴻盟社に命じて刊行せられたり。

一　正法眼藏涉典錄　木版十一冊　面山和尚著

大師滅後四百六十四年。享保元年に。面山和尚。相模國老梅庵閑居の時。斯書の事跡典據を佛經祖論及び諸書に就て涉獵し。每卷之を錄して出版せられたるものにして。元祿三年晃全禪師が拾拾して九十五卷とせられしより。斯書全部に關したる末疏の刊行は。之を以て嚆矢となす。

一　正法眼藏涉典錄續貂　木版六冊　黃泉和尚著

文化年中。前書涉典錄の未だ足らざる所を補給して。刊行せられたるものにして。斯書を拜覽するには闕くべからざるの書なり。

一　正法眼藏辨註　木版廿二冊　天桂和尚著

大師滅後四百七十八年を經て。天桂和尚。義雲禪師編集の六十卷を正本となして。畢生の心血を濺ぎ。每卷注釋を加へ。餘の三十五卷は拾遺別輯となし。或は注し。或は注せず。蓋し師は斯書は四百七十餘年間展轉謄寫し來り。魯魚の誤少なからずとなし。時に或は本文を添削せられたれば。世論紛々なれども。亦和尚一家の見解を見るべくして。後學の參究に資すべき書なり。撰述後百五十二年間。寫本にて世に行はれしが。明治十四年。師の法孫環溪禪師之を開版せられたり。

一　正法眼藏聞解　活版二冊　面山和尚著

大師滅後五百餘年を過ぎ寶曆の頃なるべし。面山和尚が九十五卷を講演せられしを。其徒斧山和尚之を筆記せられたるものなりといふ。著述後百三十餘年寫本にして傳はりしを。明治廿四年三月。知常和尚所持の寫本を原本とし。光輪和尚の校閲を得て活版に附して印行せり。又面山和尚は九十五卷に就て述贊を撰せらる。簡明に毎卷の大意を述べたるものなり。載せて面山廣錄十七卷に在り。

一　正法眼藏却退一字參　木版十四冊　本光和尚著

大師滅後五百十七年を經て。明和六年に。本光和尚。正法眼藏の假名文を漢譯し。九十五卷の毎卷。一節若くは一章。又は末尾に於て注解を加へ。或は典據引證を揭け。尚ほ義雲和尚編集の六十卷に。は。卷末に義雲和尚の頌と着語とを揭けて。之を批評せられたるものにして。著述後四十三年を經て。文化九年に俊超和尚之を開版せられたり。維新の際。その版木一時商賈の手に歸したるを。明治十五年。雪鴻。琢宗の二禪師。之を購求して曹洞宗大學に藏められしかは。再び刻本を見るに至りたり。是れ亦正法眼藏を拜覽するに頗る有益の參考書なり。

一　正法眼藏那一寶　木版廿二冊　老卯和尚著

大師滅後五百三十九年を過ぎて。寛政三年に。天桂和尚の法孫老卯和尚。辨注を祖述して注釋せられたるものなり。全部九十五卷の本文を平假名にして出版せられたり。亦是れ良好の參考書なり。

一　正法眼藏私記　活版二冊　藏海和尚著

斯書は天明年間に。藏海和尚が經豪和尚の抄と本光和尚の參注とに據り。自己の意見を加へて。簡短に解釋せられたるものにして。寫本にて世に行はれしが。明治二十九年。穆山禪師の校閲を經て。本文を挿入して會本となし。活版に付して東京鴻盟社に於て

刊行せり。以上は正法眼藏全部に關する注解とす。

一　正法眼藏開講備忘　活版一册　穆山禪師演

明治十六年遠州佐野郡大野村長松院に於て開講の時に。斯書の緣由并に參考書目を說示せられしを。侍者の筆記したるものにて。穩達和尙の「彫刻永平正法眼藏凡例」と共に必讀すべき良書なり。載せて「正法眼藏私記會本」の開卷に在り。

一　正法眼藏續絃講義　木版五册　乙堂和尙著

享保十六年出版

一　正法眼藏闢邪訣　木版一册　面山和尙著

寛保二年出版

一　正法眼藏諫臺錄　寫本二册　萬仞和尙著

明和九年撰述

一　正法眼藏迸驢乳　木版二册　空印和尙著

安永五年出版

一　正法眼藏和語梯　木版一册　萬瑞和尙著

寛保二年出版

以上の五書は正法眼藏を參究するに有益の良書なり。

正法眼藏序（永平寺第五世義雲禪師編輯七十五帖原本序）

正法眼藏。密傳密付。古之與今。嫡佛嫡祖。永平元祖。入宋。穿鑿五葉之根蔕。歸朝。能爲人天之蔭涼。式慈婆心。以和字柔漢語。奇妙善巧。令入不累文言。如石含玉。似地擎山。聊綴卑語。述其大旨耳。後昆。此八字不打開。妙心源未通徹。一大藏敎。少林妙訣。夢也未見在矣。

嘉曆四年中夏

曾孫義雲和南拜書

○　學道用心集解題

斯の書は。參禪學道の標準たる大師の垂示十章を集めたるものにして。漢文の垂訓中に於ては最も平易なるものとす。而山和尙の聞

解に。

この集十章を分ちて。中に天福二甲午三月と云ふこと兩所に見えたれば。祖師三十五歳にて。興聖(宇治の興聖寺)建立の年に當る。この年瑛祖(懐奘禪師)始めて參侍せらる。十章を集めて一冊となして。題號を安せられしは。それより十年過ぎて越(越前)に山居の後と見えたり。とあれども。十章連續して。學者淺きより深きに到る進修の要路を示したまひたるものにして。實に霧海の南針夜途の北斗なり。大師滅後百〇五年を經て後村上天皇正平十二年に。永平寺六世兼住寶慶寺曇希和尚立願し。寶慶寺大檀越藤原知冬の助緣を得て開版せられたり。

注釋

一　學道用心集聞解　木版二卷　面山和尚著

明和三年師の講演を。侍者慧觀和尚錄して之を刊行す。

一　鼇頭學道用心集　木版一冊　著者不詳

斯書の典據事畧を上層に掲げ。讀者の便に供したるものにて。明治十年六月東京森江書肆の出版に屬す。此外增冠傍註等一二同種の書あり。今之を畧す。

一　學道用心集提耳錄　活版一冊　穆山禪師著

禪師が明治三十二年駿州傳心寺に於て提唱せられ。侍者の筆記したるを。玄光和尚が校正し。明治四十一年。東京鴻盟社にて出版したるものなり。

〇

永平清規解題

斯書は。大師が嘉禎三年より。寶治三年に至る。十二年間に撰述したまひたる。典座教訓。辨道法。赴粥飯法。衆寮清規。對大己法。知事清規等の六篇を編集したるものなり。大師滅後四百十七年の後寛文七年に永平寺三十世光紹禪師之を蠹簡の裡より得。跋を附して刊行せられたり。後百廿五年を經て。寛政六年。永平寺五十世玄透禪師の時。

穩達和尚。舊刊の字畫に誤謬あり。句讀に錯亂あるを慨き。一二の道友と校讐して之を改訂し。字義音義。典據事畧を上層に掲け。且つ僧堂衆寮の二圖を附し。校訂冠註永平清規」と題し。玄透禪師の序及ひ題後を得。二卷として出版せられたり。太祖國師の「瑩山和尚清規」と共に宗門必須の寶典なり。光紹禪師の跋。玄透禪師の序。題後及ひ穩達和尚の凡例を掲けて參考に供す。

注釋

一　求寂參　木版一冊　本光和尚著

明和二年。東都靑松寺に於て。衆寮清規。對大己法。幷に龜鏡文三篇中の典據を引證し。漢文を以て注釋せられたるものにして。穩達和尚の凡例の中「瞎道參註」といへるもの是れなり。

一　典座教訓聞解　木版一冊　面山和尚著

明和四年侍者慧觀和尚之を錄す

一　衆寮清規聞解　木版一冊　面山和尚著

寛延元年侍者慧中和尚之を錄す

一　對大己法聞解　木版一冊　面山和尚著

寛延二年侍者慧中和尚之を錄す

以上三篇は。面山和尚が平易に講說せられたるものにして。穩達和尚の凡例の中「瑞芳聞解」といへるもの是れなり。

永平清規序（寛文刊行原本）

自大雄肇作而來。禪規日多矣。又有元師之筆而並馳其間者。曾自寓城南興聖。至住越北永平。所垂範之典座教訓。知事清規之諸篇也。中塵封霧隱。見稍稀。聞已鮮。逮予來住此山。適遇之於蠹簡裏。宛如陰晦長夜得夜光之珠。喜躍有餘。熟閱之。問有文字素朴者。此是國初之體也。有章句不完者。此是魚魯之差也。苟採其華。而棄其實。則豈得隨遵先誡。發揚遺意乎。故今繡梓。以告後來。其爲規訓。何第知事典座等。推而擴之。庶幾補於緇衣云。

寛文丁未孟夏四月佛誕生日現住永平光紹謹跋

永平清規序（寛政重刊原本）

欽惟我　承陽鼻祖之修清規而立一代典型也將欲以布化儀於海內經千百世而不泯者歟厥大心之所寓大智復作蔑以加焉獨奈法久弊生弊盛法衰自然之勢也悲哉拊法之徒駸々乎舍古趨今莫之能復叢林古格漠然掃地竟至於罔知我　祖有此規也間有一二賢明孜々然翼々如力行古法者僅群雞而一鶴爾東都有一具壽與余相厚珍敬祖規而其心冀復古之運也有年矣比諸世之視祖風隆汚猶秦越人之相視肥瘠者實胥壞矣頃乃慨念夫舊版莽鹵不便考覽者遂就有識評論之校讐之盡正字畫傍點之譌謬且其字義音義不易通曉者冠以小註遂改授梓而既已告成矣是其志一欲昭明于天下後世使同流之士同共遵守以擬粹身之報也尚古之忱可謂勤矣哉公雖素識山野之不文以其慷慨是同遠寄書於林下乞著一語於其首觀其盛作即余所素有意未遑者而一朝具出欣躍何可言余與公既是同聲相應同氣相求序曷敢辭適有議于旁者曰宗門之於規矩猶土苴耳老漢胡爲汲々於禮法之精麤邪余曰吁戾哉子之言也居吾語汝夫西乾　大聖人以波羅提木叉爲壽命繇是百丈氏之建禪居於華夏也創以清規佛祖之道不二其致矣然則規矩者叢林之元氣而佛壽之延促系焉苟主法者安可不擇以故我　祖所言列聖眼睛者是亦大規末章之親訓也而荒墜先緒玷辱正宗以竊明遠裔之稱者實吾所不忍也子之言豈非戾哉議者逡巡而退因併記爲序。

寛政第六龍次甲寅夏五月

備之圓通東堂嗣祖比丘玄透中拜稽首敬撰

謹裁一偈恭題重刊冠註永平清規後

幾歲宗門廢祖規宛如暗夜失燈之日光明照時重至有目何人足不隨

勅特賜洞宗宏振禪師現住永平玄透盤談

永平清規凡例（寛政重刊原本）

斯書舊刊。寛文丁未之歳。永平光紹禪師。適得之於蠹簡內所刻也。可謂有忠勤于祖室矣。而舊刊剞劂莽鹵。而字畫誤謬。句讀錯亂。殆不可讀者。往往有之。讀者憂之。故今與一二之道友相詢。校讐之討論。以訂正其誤訛。再命剞劂上梓。我輩固管見蠡測。不能無疎脫。冀同流之賢哲。勿吝是正焉。書中間如字義不明了者。一依字典精覈其義。且如文義不可解者。事略之不分曉者。亦一一標揭上層。或細書本文傍。附載註釋。使初學備看讀之一助。

如冠註及事略。大槩皆依古老所援引。如釋衆寮清規。對大已法等。全依瑞方聞解。晧道參註。增減其文字。摘意記注。但有詳略之異同而已。讀者勿訝焉。

如僧堂衆寮二圖舊本不載之。今據本敕修。校定。備用等所載之古圖。寫其圖樣。附在各處焉。夫明規一勅興。其弊波及本邦。遂蠹損吾祖訓。至其甚。一愚信彼弊規。視祖規如怨讎。是以祖風之不振久矣。其弊遂至翻修僧堂之古樣。擬搆教家之十六觀堂。是稱禪堂焉。革替衆寮之舊圖。以爲且過寮。而喚且過安稱衆寮。幸雖存其舊名。徒爲平常所接待來賓處。全失其實矣。噫可惜哉。庶幾慕古之兒孫。依二圖。改觀古樣之本式。報答乃祖創業之洪恩焉。

維時寛政甲寅謹識

○　永平廣錄解題

斯書は。大師一代の上堂。小參。法語。頌古。題賛。偈頌等を。大師の法嗣懷奘。詮慧。及ひ大師の法孫義演の三師が編集して十卷とせられ。爾來久しく展轉謄寫して傳はり來りしを。大師滅後四百十九年を經て。寛文十二年に卍山和尚發願して之を校正刊行せられたり。

注釋

一　永平廣錄注　　寫本十卷　　面山和尚著

一　永平廣錄點茶湯　　寫本十卷　　本光和尚著

右二書共に假名文にて。本文を解釋したるものなり。現今寫本に

て傳はるを以て。著述の年月を詳にせず。

廣錄序（寛文刊行原本）

興聖永平二會說法。中華扶桑兩地吐演。門人編集。謂之廣錄。凡若干萬言。共爲十卷也。大師滅後。其徒義尹。持此廣錄。遠入宋地。就瑞巖遠需爲校正。需之遠公者。蓋以其與大師同出於天童淨老也。遠公好略。拔出百千之十一。集爲一卷。作序作跋。跋之中曰。大海汪洋。渺無涯涘。嘗一滴則百川異流。具此滴中矣。靈隱寧公。淨慈愚公。亦同跋焉。或以巨海之變而稱之。或以超師之作而贊也。中華達者。嘆賞如此矣。我門之徒。其機不一。有好略者。有好廣者。若存略而無廣。則攝化不普。蘊崇似乏。雖然。斯錄秘之古筐中。後代當之舊青氈。帙散簡斷。微言將滅。譬如寶劒埋於地。美玉韜於石。可以惜焉。可以傷焉。我輩後生。遠受大師。豈得如視秦人肥瘠。曾不加欣戚於其心哉。遂欲使工鏤板。數年于茲。顧其爲書。以展轉寫去。文多有脫誤。因廣求別本。每逢人正焉。今茲暇日。再考錄中之顚末。粗加倭點。以付之梓人。要壽其慧命。而及無貌者。是我一片赤心腸也矣。原夫。大師諱道元。京兆人。示降誕迹。在土御門帝。正治二年。實洞山悟本之再來也。初歷本朝講席。而博窮內外之學。遂受大戒於明全。後遊宋地法窟。而偏探單傳之宗。果得印可於淨老。歸來開法。勉致弘通。戒乘俱急。而周接人天。行解兼備。而大振祖風。當其化方盛。不欲居其功。早退城南之寺。深入若耶之山。天子賜衣號。不以爲榮。相將盡歸投。不以爲心。以朴而立宗。以質而教徒。大師所爲。其有旨哉。四百餘年。遺風綿綿。至於今日。猶不墜地者。視之諸宗。未見其儔矣。兒孫若能玩斯錄。而心大師心。則愚公之所謂從而魯變者。豈虛語哉。

書寛文壬子中秋念八日後學沙門白卍山謹書

廣錄跋（寛文刊行原本）

總持非文字。文字顯揔持。道本無言。以言表道。是祖教之正印。參學之皎鏡也。我永平大師。頓剪文字之葛藤。直脫語言之徑路。然而有正法眼藏等諸書者何也。蓋揔離文之文。顯彼揔持。以無言之言。表此道焉

爾。斯錄之體格。與諸家不同。文字質素。語言朴古。自非入總持門遊戲道妙者。而能窮詮旨幽玄耶。至如夫斥宗門專局於禪稱。辨大耳三藏之不知國師。非唯第三度。皆前賢所未發。而大師肇言者歟。既見略錄。則雖知一滴具全潮。更閱大全。可以窺波瀾浩渺。邊際深廣矣。嗚呼。斯錄有補於法門。大師有功於佛祖。其誰措異論耶。實不在禹下者也。

壬子重陽日　卍山題

○　寶慶記解題

寶慶記は。南宋寶慶年中大師天童山に參學の際に於ける隨時の筆記にして。又全部のものにあらざるの說あり。而して大師亦之を世出世間に示されしものにあらざるなり。然れども金科玉條の後學を啓發するもの鮮少にあらず。故に附錄として之を本書に收む。

注釋

一　寶慶記聞解一名隨聞記　木版二冊　面山和尚著

斯書は。面山和尚が本文を講演せられしを。其の徒斧山和尚が假名文を以て筆記せられたるものなり。

一　寶慶記事林鈔　寫本一冊　著者不詳

斯書は。本文中の故事典據等を蒐錄したるものなり。

一　寶慶記（首書傍訓）　木版一冊　龍跳和尚編

斯書は。卷頭に故事典據を揭げ。本文の傍に點註を施したるものなり。明治十一年八月の刊行に屬す。

一　寶慶記摘葉集　木版二冊　義道和尚編

斯書は。面山和尚の聞解が本文を畧し。且つ故事典據なきを以て。聞解一部にては看讀に不便なるより。本文の間に聞解と故事典據とを挿入したるものなり。明治十一年九月の刊行に屬す。

彫寶慶記序（寛延刊行原本）

積年閣室。點孤燈。則剔。遍界疑關。撥寸板。忽闢。所以黃面之利見於月氏。而碧眼之來蘇于赤縣也。熊耳隻履之後。歲月七百。人澆法衰。當爾

之時。有天童淨祖出現。光前絶後。瑞媲烏跋。我承陽遠昇其堂。實磁鐵之眞契也。面授大法。如火與火。且親聞繾綣。手錄以遺兒孫。簽之云。寶慶記。乃采彼時之曆號也。一一疑問。條條開拓。莫不朗闡於十方。而闡疑於千歲焉。余十有六歲。親敎師前永平遂雲峰和尙。以所手書本賜之。且告謂。此是謄廣福大智禪師之手澤也。我今授汝。帶之永爲學道標準。從爾以來。囊藏于行脚。篋秘於住山。到今半百餘年。雖侍者亦不許令視。間看他持類本。倒寫亥豕。脫字不一。或時皺眉。因憶者箇實佛祖慧命之所係也。秘而無益。冀與天下雲仍共之。以酬滅後五百年之法乳。乃與薦福義雲和尙本考讎。以鏤木王。蓋物也者。多則易棄。少則不周。是故印都計一萬月而破板。所冀免多則易棄之罪。伏惟。承陽傑雲英仍。充之肘後符。則行暗本得執炬之勇。臨闕必有排闥之勢矣。

寛延第三仲春五日

遠孫第二十九葉若州永福菴主瑞方面山焚盥九拜謹題

○

傘松道詠解題

傘松道詠は。大師隨時の歌詠を後世に於て編輯したるものなり。傘松は永平寺の前の山號なる傘松峰に因みて命名したるなり。而して其の中幾干首か後人の攙入に係るものありとの說あり。然れども未だ明に之を甄別したるものなし。亦誠に之を甄別し難きなり。故に今は附錄として之を本書に收む。若し夫れ其の水乳を辨することは。偏に後の鵞王に望む。

注　解

一　承陽大師傘松道詠集　二卷　龍跳和尙講述

斯書は。明治十五年龍跳和尙本書に就き。丁寧に注解を施したるものなり。名古屋市梶田書肆より發刊す。

○

正法眼藏隨聞記解題

正法眼藏隨聞記は。大師隨時に。其の法嗣孤雲懷奘禪師に親誨せら

れたるの示教を禪師自之を筆記せられしなり。初心參學者の爲めには實に肘後の寶符なり。故に附錄として之を本書に收む。

正法眼藏隨聞記序（寶曆重刊原本）

余歲念七。閱藏於總之山王林。衆中有上毛東海慧命。長于余也。幾乎二十夏。雖然。亦時訪藏殿而話。因謂。曾留錫於越之祖山。拜讀古寫正法眼藏隨聞記。與所印版本。對考之。大有差異。無暇繕寫。到今慊慊。略話自所記持之差異。余聞歡喜。頗好本也。自爾追慕不止。到處尋覓之。亦不獲。後寓加之大乘。時益堂甫公爲堂頭也。復示如向事。後經十餘年。粥飯于空印。前席雪心和尚。是甫公神足。以此語之。和尚謂。我知其事。且持其本。因懇請拜讀。其與印版。所差異之三豕。皆符合前聞。雖然。住持事繁。無暇淨寫。洎隱此莅。從事于此。幾乎周年。逐行較正。漸得完全。不欲私淑。重刻以布宇內。因舉凡例。令讀者知差異之梗槩。伏冀。祖訓親密之諄諄。傳之悠久。以不與鼎鹵磷者也。

寶曆八年戊寅二月吉旦

若州永福開闢而山瑞方拜題

○光明藏三昧解題

光明藏三昧は。大師の示教にあらず。永平寺第二世孤雲懷奘禪師の垂誨なり。而して之を本書の附錄に收むる所以のものは。蓋し禪師は大師正嫡の法嗣にして。大師法燈の今日に傳光する所以は。一に禪師嗣承の恩賚にして。又本書の垂誨たる。大師の唱道と毫釐の差なし。然るに本書は往々世人に遺忘せらるゝの憾あり。大方の君子收錄の微衷を諒せんことを。

○光明藏三昧序（明和刊行原本）

佛言。智慧光明。如日之照。卽是般若觀照。所謂照見五蘊皆空是也。宗門稱之回光返照。永祖一代擧化。未曾外此。奘祖承之。以說此卷。可謂子順於父也。余壯年閱藏於總之山王林。因有上毛東海老宿。以此一

卷。付囑於余。自謂。二十年前。得于越之祖山。余喜躍自奉。案瑩祖法語云。其坐禪者。安樂法門。大解脫妙法也。人人以心傳心之心印。箇箇以法受法之表準。智愚無別。凡聖不隔。盡安住自受用三昧。齊證入光明藏三昧。本離心意識之運轉。更非念想觀之測量。諸人識取也未。良久云。不思量而現。不回互而成。瑩祖可謂嫡嫡相承。不移易絲毫。豐後州大龍山永慶古刹。寶治年中。奘祖之所草剏也。現住號大津。名玄梁。捨衣資鋟梓。老衲隨喜。卒加贊偈。并充序云。時節熟來感妙詮。無量劫外好因緣。金翅難繫黃金繳。玉馬尙加白玉鞭。風戛瑩音除曉霧。水涵月影朗秋天。光明三昧堂堂露。遍照索訶界三千。

維時明和三年丙戌八月二十三日

第二十八代遠孫八十四翁方而山謹題

○

曹洞教會修證義解題

曹洞教會修證義は。去る明治二十三年中に於て。永平寺六十三世琢宗禪師總持寺獨住二世楳仙禪師が。在家人に安心起行の標準を示す爲め。幾多の苦辛を經て。大師正法眼藏九十五篇の中より斷章集句。而かも一句一字の私見を加へずして合纂せられたる佛道修證の敎範なり。初心參學者の爲めに特に本書の附錄に收む。

解題終

承陽大師聖教全集 第壹卷

法孫 默地說 三 謹輯

普勸坐禪儀

原夫。道本圓通。爭假修證。宗乘自在。何費工夫。況乎。全體迥出塵埃兮。誰信拂拭之手段。大都不離當處兮。豈用修行之脚頭者乎。然而毫釐有差。天地懸隔。違順纔起。紛然失心。直饒誇會豐悟兮。獲瞥地之智通。得道明心兮。擧衝天之志氣。雖道遙於入頭之邊量。幾虧闕於出身之活路。矧彼。祇園之爲生知兮。端坐六年之蹤跡可見。少林之傳心印兮。而壁九歲之聲名尚聞。古聖既然。今人盍辨。所以須休。尋言逐語之解行。須學回光返照之退步。身心自然脫落。本來面目現前。欲得恁麼事。急務恁麼事。夫參禪者。靜室宜焉。飲食節矣。放捨諸緣。休息萬事。不思善惡。莫管是非。停心意識之運轉。止念想觀之測量。莫圖作佛。豈拘坐臥乎。尋常坐處。厚敷坐

物上用蒲團或結跏趺坐或半跏趺坐謂結跏趺坐先以右足安左胜上左足安右胜上半跏趺坐但以左足壓右胜矣寬繫衣帶可令齊整次右手安左足上左掌安右掌上兩大拇指面相拄矣乃正身端坐不得左側右傾前躬後仰要令耳與肩對鼻與臍對舌掛上腭唇齒相着眼須常開鼻息微通身相既調欠氣一息左右搖振兀兀坐定思量個不思量底不思量底如何思量非思量此乃坐禪之要術也所謂坐禪非習禪唯是安樂之法門也究盡菩提之修證也公案見成羅籠未到若得此意如龍得水似虎靠山當知正法自現前昏散先撲落若從坐起徐徐動身安詳而起不應卒暴嘗觀超凡越聖坐脫立亡一任此力矣況復拈指竿鍼鎚之轉機擧拂拳棒喝之證契未是思量分別之所能解也豈爲神通修證之所能知也可爲聲色之外威儀那非知見之前軌則者歟然則不論上智下愚莫簡利人鈍者專一工夫正是辨道修證自不染汚趣向更是平常者也凡夫自界他方西天東地齊持佛印一擅宗風唯務打坐被礙兀地雖謂萬別千差祇管參禪辨道何拋却自家之坐牀謾去來他國之塵境若錯一步當面蹉過既得人身之機要莫虛度光陰保任佛道之要機誰浪樂石火加以形質如草露運命似電光倏忽便空須臾即失冀其參學高流久習模象勿惟眞龍精進直指端的之道尊貴絕學無爲之人合沓佛佛之菩提嫡嗣祖祖之三昧久爲恁麼須是恁麼寶藏自開受用如意

普勸坐禪儀終

化一本戲に作る

正法眼藏辨道話

諸佛如來ともに妙法を單傳して。阿耨菩提を證するに。最上無爲の妙術あり。これたたほとけ佛にさつけてよこしまなることなきは。すなはち自受用三昧。その標準なり。この三昧に遊化するに。端坐參禪を正門とせり。この法は。人人の分上にゆたかにそなはれりといへとも。いまた修せさるにはあらはれす。證せさるにはうることなし。はなてはてにみてり。一多のきはならんや。かたれはくちにみつ。縱横きはまりなし。諸佛のつねにこのなかに住持たる。各各の方面に知覺をのこさす。群生のとこしなへにこのなかに使用する。各各の知覺に方面あらはれす。いまをしふる功夫辨道は。證上に萬法をあらしめ。出路に一如を行するなり。その超關脫落のとき。この節目にかかはらんや。予發心求法よりこのかた。わか朝の遍方に知識をとふらひきちなみに建仁の全公をみる。あひしたかふ霜華。すみやかに九廻をへたり。いささか臨濟の家風をきく。全公は祖師西和尚

の上足として。ひとり無上の佛法を正傳せり。あへて餘輩のならふへきにあらす。予かさねて大宋國におもむき。知識を兩浙にとふらひ。家風を五門にきく。つひに大白峰の淨禪師に參して。一生參學の大事ここにをはりぬ。それよりのち大宋紹定のはしめ。本鄉にかへりし。すなはち弘法救生をおもひとせり。なほ重擔をかたにおけるかことし。しかあるに弘通のこころを放下せん激揚のときをまつゆゑに。しはらく雲遊萍寄して。まさに先哲の風をきこえんとす。たしかのつから名利にかかはらす道念をさきとせん。眞實の參學あらんか。いたつらに邪師にまとはされて。みたりに正解をおほひ。むなしく自狂にふふて。ひさしく迷鄉にしつまん。なにによりてか般若の正種を長し。得道の時をえん。貧道はいま雲遊萍寄をこととすれは。いつれの山川をかとふらはん。これをあはれむゆゑに。まのあたり大宋國にして禪林の風規を見聞し。知識の玄旨を稟持せしなし。しるしあつめて。參學閑道の人にのこして佛家の正法をしらし

閑一本問に作る

めんとす。これ眞訣ならんかも。いはく大師釋尊靈山會上にして法を迦葉につけ。祖祖正傳して。菩提達磨尊者にいたる。尊者みつから神丹國におもむき。法を慧可大師につけき。これ東地の佛法傳來のはしめなり。かくのことく單傳して。おのつから六祖大鑑禪師にいたることとき。眞實の佛法。まさに東漢に流演して。節日にかかはらぬむねあらはれきときに六祖に二位の神足ありき。南嶽の懷讓と。青原の行思となり。ともに佛印を傳持して。おなしく人天の導師なり。その二派の流通するにより。五門ひらけたり。いはゆる法眼宗。潙仰宗。曹洞宗。雲門宗。臨濟宗なり。見在大宋には臨濟宗のみ天下にあまねし。五家ことなれとも。たた一佛心印なり。大宋國も後漢よりこのかた。教籍あとをたれて一天にしけりといへとも。雌雄いまたさためさりき。祖師西來ののち。直に葛藤の根源をきり。純一の佛法ひろまれり。わかくにもまたしかあらんことをこひねかふへし。いはく佛法を住持せし諸祖ならひに諸佛とともに自受用三昧に端坐依行

ことき一本のときに作る

直一本眞に作る

するを。その開悟のまさしきみちとせり。西天東地さとりをえし人。その風にしたがへり。これ師資ひそかに妙術を正傳し。眞訣を稟持せしによりてなり。宗門の正傳にいはく。この單傳正直の佛法は。最上のなかに最上なり。參見知識のはしめより。さらに燒香禮拜念佛修懺看經をもちゐず。たたし打坐して身心脫落することをえよ。もし人一時なりといふとも。三業に佛印を標し。三昧に端坐するとき。遍法界みな佛印となり。盡虛空ことごとくさとりとなる。ゆゑに諸佛如來をしては本地の法樂をましし。覺道の莊嚴をあらたにす。およひ十方法界。三途六道の群類。みなともに一時に身心明淨にして。大解脫地を證し。本來面目現するとき。諸法みな正覺を證會し萬物ともに佛身を使用して。すみやかに證會の邊際を一超して。覺樹王に端坐し。一時に無等等の大法輪を轉し。究竟無爲の深般若を開演す。これらの等正覺。さらにかへりてしたしくあひ冥資するみちかよふかゆゑに。この坐禪人。確爾として身心脫落し。從來雜穢の知見思

一本の上に佛事をなすの五字有り

皆一本混に作る

直一本眞に作る

量を截斷して。天眞の佛法に證會し。あまねく微塵際そこはくの諸佛如來の道場ことに。佛事を助發し。ひろく佛向上の機にかうふらしめて。よく佛向上の法を激揚す。このとき。十方法界の。土地艸木。牆壁瓦礫。みな佛事をなすをもて。そのおこすところの風水の利益にあつかるともから。みな甚妙不可思議の佛化に冥資せられて。ちかきさとりをあらはす。この水火を受用するたくひ。みな本證の佛化を周旋するゆゑに。これらのたくひと共住して同語するものまたことことくあひたかひに無窮の佛德そなはり。展轉廣作して。無盡無間斷。不可思議。不可稱量の佛法を。遍法界の內外に流通するものなり。しかあれともこのもろもろの當人の知覺に昏せさらしむることは。靜中の無造作にして直證なるをもてなり。もし凡流のおもひのことく。修證を兩段にあらせは。おのおのあひ覺知すへきなり。もし覺知にましはるは。證則には迷情およはさるかゆゑに。また心境ともに靜中の證入悟出あれとも。自受用の境界な

一本つてへの字上無し

るをもて。一塵をうこかさず。一相をやふらす。廣大の佛事。甚深微妙の佛化をなす。この化道のおよぶところの艸木土地。ともに大光明をはなち。深妙法をとくことときはまるときなし。艸木牆壁は。よく凡聖含靈のために宣揚し。凡聖含靈は。かへつて艸木牆壁のために演暢す。自覺覺他の境界。もとより證相をそなへてかけたることなく。證則おこなはれておこたるときなからしむ。ここをもてわつかに一人一時の坐禪なりといへとも。諸法とあひ冥し。諸時とまとかに通するかゆゑに。無盡法界のなかに去來現に。常恒の佛化道事をなすなり。彼彼ともに一等の同修なり。同證なり。たた坐上の修のみにあらす。空をうちてひひきをなすこと撞の前後に妙聲綿綿たるものなり。このことはのみにかきらんや。百頭みな本面目に本修行をそなへて。はかりはかるへきにあらす。しるへしたとひ十方無量恒河沙數の諸佛ともにちからをはけまして佛智慧をもて。一人坐禪の功德をはかりしりきはめんとすといふとも。あへてほとりをうる

ことあらし。」いまこの坐禪の功德高大なることをききをはりぬ。おろかならん人うたがふていはん佛法におほくの門あり。なにをもてかひとへに坐禪をすすむるや。しめしていはく。これ佛法の正門なるをもてなり。」とふていはく。なんそひとり正門とする。しめしていはく。大師釋尊まさしく得道の妙術を正傳し。また三世の如來ともに坐禪より得道せり。このゆゑに正門なることをあひつたへたるなり。しかのみにあらす。西天東地の諸祖みな坐禪より得道せるなり。ゆゑにいま正門を人天にしめす。とふていはく。あるひは如來の妙術を正傳しまたは祖師のあとをたつぬるによらん。まことに凡慮のおよふにあらす。しかはあれとも讀經念佛はおのつからさとりの因緣となりぬへし。たとむなしく坐してなすところなからん。なにによりてかさとりをうるたよりとならん。しめしていはく。なんちいま諸佛の三昧無上の大法をむなしく坐してなすところなしとおもはん。これを大乘を謗する人とす。まとひのいとふかき。大

海のなかにゐなから。水なしといはんかことし。すてにかたしけなく諸佛自受用三昧に安坐せり。これ廣大の功德をなすにあらすや。あはれむへしまなこ、いまだひらけず。こころなほゑひにあることを。おほよそ諸佛の境界は。不可思議なり。心識のおよふへきにあらす。いはんや不信劣智のしることをえんや。たた正信の大機のみよくいることをうるなり。不信の人はたとひをしふともうくへきことかたし。靈山になほ退亦佳矣のたくひあり。おほよそ心に正信おこらは修行し參學すへし。しかあらすはしはらくやむへし。むかしより法のうるほひなきことをうらみよ。又讀經念佛等のつとめにうるところの功德をなんちしるやいなや。たたしたをうこかしこゑをあくるを。佛事功德とおもへる。いとはかなし。佛法に擬するにうたたとほく。いよいよはるかなり。又經書をひらくことはほとけ頓漸修行の儀則をしへおけるをあきらめしり。教のことく修行すれは。かならす證をとらしめんとなり。いたつらに思量念度をつ

杜貧一本貧利に作る

ひやして。菩提をうる功德に擬せんとにはあらぬなり。おろかに千萬誦の口業をしきりにして。佛道にいたらんとするは。なほこれなかえをきたにして越にむかはんとおもはんかことし。又圓孔に方木をいれんとせんとおなし。文をみなから修するみちにくらき。それ醫方をみる人の合藥をわすれん。なにの益かあらん。口聲をひまなくせる。春の田のかへるの晝夜になくかことし。つひに又益なし。いはんやふかく名利にまとはさるるやから。これらのことをすてかたし。それ利貪のこころはなはたふかきゆゑに。むかしすてにありき。いまのよになからんや。もともあはれむへし。たたまさにしるへし七佛の妙法は。得道明心の宗匠に。契心證會の學人あひしたかふて正傳すれは。的旨あらはれて稟持せらるるなり。文字習學の法師のしりおよふへきにあらす。しかあれはすなはちこの疑迷をやめて。正師のをしへにより。坐禪辨道して諸佛の自受用三昧を證得すへし。とふていはく。いまわか朝につたはれるところの。法華宗。華

教一本宗に作る　一箇の心二本は共に身に作る　心一本身に作る　佛成一本道に作る　直一本眞に作る

嚴教ともに大乘の究竟なり。いはんや眞言宗のときは。毗盧遮那如來したしく金剛薩埵につたへて。師資みたりならす。その談するむね卽心是佛。是心作佛といふて。多劫の修行をふることなく。一座に五佛の正覺をとなふ。佛法の極妙といふへし。しかあるにいまいふところの修行。なにのすくれたることあれは。かれらをさしおきてひとへにこれをすすむるや。しめしていはく。しるへし佛家には教の殊劣を對論することなく。法の淺深をえらはす。たたし修行の眞僞をしるへし。艸華山水にひかれて。佛道に流入することありき。土石沙礫をにきりて。佛印を稟持することあり。いはんや廣大の文字は萬象にあまりてなほゆたかなり。轉大法輪。また一塵にをさまれり。しかあれはすなはち卽心卽佛のことば。なほこれ水中の月なり。卽坐成佛のむね。さらにまたかかみのうちのかけなり。ことはのたくみにかかはるへからす。いま直證菩提の修行をすすむるに。佛祖單傳の妙道をしめして。眞實の道人とならしめんとなり。又佛法

おふ一本おもふに作る

を傳授することはかならす證契の人をその宗師とすへし。文字をかそふる學者をもてその導師とするにたらす。一盲の衆盲をひかんかことし。いまこの佛祖正傳の門下にはみな得道證契の哲匠をうやまひて。佛法を住持せしむ。かるかゆゑに冥陽の神道もきたり歸依し。證果の羅漢もきたり問法するに。おのおの心地を開明する手をさつけすといふことなし。餘門にいまたきかさるところなり。たた佛弟子は佛法をならふへし。又しるへしわれらはもとより無上菩提かけたるにあらす。とこしなへに受用すといへとも。承當することをえさるゆゑに。みたりに知見をおこすことをならひとしてこれを物とおふ。によりて。大道いたつらに蹉過す。この知見によりて。空華まちまちなり。あるひは十二輪轉。二十五有の境界とおもひ。三乘五乘有佛無佛の見つくることなし。この知見をならふて佛法修行の正道とおもふへからす。しかあるをいまはまさしく佛印によりて。萬事を放下し。一向に坐禪するとき。迷悟情量のほとりを

こえて。凡聖のみちにかかはらす。すみやかに格外に逍遙し。大菩提を受用するなり。かの文字の筌罠にかかはるものの。かたをならふるにおよはんや。」とふていはく。三學のなかに定學あり。六度のなかに禪度あり。ともにこれ一切の菩薩の。初心よりまなふところ。利鈍をわかす修行す。いまの坐禪もそのひとつなるへし。なにによりてかこのなかに如來の正法あつめたりといふや。しめしていはく。いまこの如來一大事の。正法眼藏。無上の大法を。禪宗となつくる。ゆゑに。この問きたれり。しるへしこの禪宗の號は。神丹以東におこれり。竺乾にはきかす。はしめ達磨大師。嵩山の少林寺にして。九年面壁のあひた。道俗いまた佛正法をしらす。坐禪を宗とする婆羅門となつけき。のち代代の諸祖。みなつねに坐禪をもはらす。これをみるおろかなる俗家は實をしらす。ひたたけて坐禪宗といひき。いまのよには坐のことはを簡して。たた禪宗といふなり。そのこころ諸祖の廣語にあきらかなり。六度およひ三學の禪定にならつていふへきに

あらす。この佛法の相傳の嫡意なること。一代にかくれなし。如來むかし靈山會上にして。正法眼藏。涅槃妙心。無上の大法をもて。ひとり迦葉尊者にのみ付法せし儀式は。現在して上界にある天衆。まのあたりみしもの存せり。うたかふへきにたらす。おほよそ佛法はかの天衆とこしなへに護持するものなり。その功いまたふりす。まさにしるへしこれは佛法の全道なり。ならへていふへき物なし。」とふていはく。佛家なにによりてか四儀のなかに。たたし坐にのみおほせて禪定をすすめて證入をいふや。しめしていはく。むかしよりの諸佛。あひつきて修行し證入せるみちきはめしりかたし。ゆゑをたつねは。たた佛家のもちゐるところをゆゑとしるへし。このほかにたつぬへからす。たたし祖師ほめていはく。坐禪はすなはち安樂の法門なり。はかりしりぬ四儀のなかに安樂なるゆゑか。いはんや一佛二佛の修行のみちにあらす。諸佛諸祖にみなこのみちあり。」とふていはく。この坐禪の行は。いまた佛法を證會せさらんものは。坐禪

辨道してその證をとるへし。すでに佛正法をあきらめえん人は。坐禪なにのまつところかあらん。しめしていはく。癡人のまへにゆめをとかす。山子の手には舟棹をあたへかたしといへとも。さらに訓をたるへし。それ修證はひとつにあらすとおもへる。すなはち外道の見なり。佛法には修證これ一等なり。いまも證上の修なるゆゑに。初心の辨道。すなはち本證の全體なり。かるかゆゑに修行の用心をさつくるにも。修のほかに證をまつおもひなかれとをしふ。直指の本證なるかゆゑなるへし。すてに修の證なれは。證にきはなく。證の修なれは。修にはしめなし。ここをもて釋迦如來。迦葉尊者。ともに證上の修に受用せられ。達磨大師。大鑑高祖。おなしく證上の修に引轉せらる。佛法住持のあとみなかくのことし。すてに證をはなれぬ修あり。われらさいはひに一分の妙修を單傳せる初心の辨道。すなはち一分の本證を無爲の地にうるなり。しるへし修をはなれぬ證を染汙せさらしめんかために。佛祖しきりに修行のゆるくすへから

さるとをしふ。妙修を放下すれは。本證手の中にみてり。本證を出身すれは。妙修通身におこなはる。又まのあたり大宋國にしてみしかは。諸方の禪院。みな坐禪堂をかまえて。五百六百。およひ一二千僧を安して。日夜に坐禪をすすめき。その席主とせる。傳佛心印の宗師に。佛法の大意をとふらひしかは。修證の兩段にあらぬむねをきこえき。このゆゑに門下の參學のみにあらす。求法の高流。佛法のなかに眞實をねかはん人。初心後心をえらはす。凡人聖人を論せす。佛祖のをしへにより。宗匠の道をおふて。坐禪辨道すへしとすすむ。きかすや祖師のいはく。修證はすなはちなきにあらす。染汙することはえし。又いはく。道をみるもの道を修すと。しるへし得道のなかに修行すへしといふことを。」とふていはく。わか朝の先代に教をひろめし諸師。ともにこれ入唐傳法せしとき。なんそこのむねをさしおきて。たた教をのみつたへし。しめしていはく。むかしの人師この法をつたへさりしことは。時節のいまたいたらさりしゆゑなり。」とふてい

はく。かの上代の師。この法を會得せりや。しめしていはく。會せは通してん。」とふていはく。あるかいはく。生死をなけくことなかれ。生死を出離するに。いとすみやかなるみちあり。いはゆる心性の常住なることはりをしるなり。そのむねたらく。この身體は。すでに生あれはかならす滅にうつされゆくことありとも。この心性はあへて滅することなし。よく生滅にうつされぬ心性わか身にあることをしりぬれは。これを本來の性とするかゆゑに。身はこれかりのすかたなり。死此生彼さたまりなし。心はこれ常住なり。去來現在かはるへからす。かくのことくしるを生死をはなれたりとはいふなり。このむねをしるものは。從來の生死なかくたえて。この身をはるとき。性海にいる。性海に朝宗するとき。諸佛如來のことく。妙德まさにそなはる。いまはたとひしるといへとも。前世の妄業になされたる身體なるかゆゑに。諸聖とひとしからす。いまたこのむねをしらさるものは。ひさしく生死にめくるへし。しかあれはすなはちたたいそき

て心性の常住なるむねを了知すへし。いたつらに閑坐して一生をすくさん。なにのまつところかあらん。かくのことくいふむね。これはまことに諸佛諸祖の道にかなへりやいかん。しめしていはく。いまいふところの見。またく佛法にあらす。先尼外道か見なり。いはく。かの外道の見は。わか身。うちにひとつの靈知あり。かの知すなはち緣にあふところに。よく好惡をわきまへ。是非をわきまふ。痛痒をしり。苦樂をしる。みなかの靈知のちからなり。しかあるにかの靈性は。この身の滅するとき。もぬけてかしこにうまるる。ゆゑにここに滅すとみゆれともかしこの生あれは。なかく滅せすして常住なりといふなり。かの外道か見かくのことし。しかあるをこの見をならふて佛法とせん。瓦礫をにきりて金寶とおもはんよりもなほおろかなり。癡迷のはつへきたとふるにものなし。大唐國の慧忠國師ふかくいましめたり。いま心常相滅の邪見を計して。諸佛の妙法にひとしめ。生死の本因をおこして。生死をはなれたりとおもはんおろか

なるにあらすや。もともあはれむへし。たたこれ外道の邪見なりとしれ。みみにふるへからす。ことやむことをえす。いまなほあはれみをたれてなんちか邪見をすくはしるへし佛法にはもとより身心一如にして性相不二なりと談する。西天東地おなしくしれるところ。あへてたかふへからす。いはんや常住を談する門には萬法みな常住なり。身と心とをわくことなし。寂滅を談する門には諸法みな寂滅なり。性と相とをわくことなし。しかあるをなんそ身滅心常といはん。正理にそむかさらんや。しかのみならす。生死はすなはち涅槃なりと覺了すへし。いまた生死のほかに涅槃を談することなし。いはんや心は身をはなれて常住なりと領解するをもて。生死をはなれたる佛智に妄計すといふとも。この領解知覺の心は。すなはちなほ生滅して。またく常住ならす。これはかなきにあらすや。嘗觀すへし。身心一如のむねは佛法のつねの談するところなり。しかあるになんそこの身の生滅せんとき。心ひとり身をはなれて生滅せ

はは一本に作るん

たか一本ふうふかに作るふ

さらん。もし一如なるときあり。一如ならぬときあらは。佛説おのつから虛妄にありぬへし。又生死はのそくへき法そとおもへるは。佛法をいとふつみとなる。つつしまさらんや。しるへし佛法に心性大總相の法門といふは。一大法界をこめて。性相をわかす。生滅をいふことなし。菩提涅槃におよふまて。心性にあらさるなし。一切諸法。萬象森羅ともに。たたこれ一心にして。こめすかねさることなし。このもろもろの法門。みな平等一心なり。あへて異違なしと談する。これすなはち佛家の心性をしれる樣子なり。しかあるをこの一法に身と心とを分別し生死と涅槃とをわくことあらんや。すでに佛子なり。外道の見をかたる狂人のしたのひひきをみみにふることなかれ。」とふていはく。この坐禪をもはらせん人。かならす戒律を嚴淨すへしや。しめしていはく。持戒梵行は。すなはち禪門の規矩なり。佛祖の家風なり。いまた戒をうけす。又戒をやふれるもの。その分なきにあらす。」とふていはく。この坐禪をつとめん人。さらに眞言止觀の

法一本佛に作る

行をかね修せん。さまたけあるへからすや。しめしていはく。在唐のとき。宗師に眞訣をききしちなみに。西天東地の古今に佛印を正傳せし諸祖。いつれもいまたしかのことときの行をかね修すときかすといひき。まことに一事をことときとせされは。一智に達することなし。」とふていはく。この行は在俗の男女もつとむへしや。ひとり出家人のみ修するか。しめしていはく。祖師のいはく。佛法を會すること男女貴賤をえらふへからすときこゆ。」とふていはく出家人は。諸緣すみやかにはなれて。坐禪辨道にさはりなし。在俗の繁務は。いかにしてか一向に修行して。無爲の佛道にかなはん。しめしていはく。おほよそ佛祖あはれみのあまり。廣大の慈門をひらきおけり。これ一切衆生を證入せしめんかためなり。人天たれかいらさらんものや。ここをもてむかしいまをたつぬるに。その證これおほし。しはらく代宗順宗の帝位にして萬機いとしけかりし。坐禪辨道して佛祖の大道を會通す。李相國。防相國。ともに輔佐の臣位にはんへりて。一天の股肱たりし。坐禪辨道して。佛祖の大道に證入す。たたこれこころさしのありなしによるへし。身の在家出家にはかかはらし。又ふかくことの殊劣をわきまふる人。おのつから信することあり。いはんや世務は佛法をさゆとおもへるものはたた世中に佛法なしとのみしりて。佛中に世法なきことをいまたしらさるなり。ちかころ大宋に馮相公といふありき。祖道に長せりし大官なり。のちに詩をつくりてみつからをいふにいはく。公事之餘喜坐禪。少曾將脇到牀眠。雖然現出宰官相。長老之名四海傳。これは官務にひまなかりし身なれとも。佛道にこころさしふかけれは。得道せるなり。佗をもてわれをかへりみ。むかしをもていまをかかみるへし。大宋國には。いまのよの國王大臣士俗男女。ともに心を祖道にととめすといふことなし。武門文家。いつれも參禪學道をこころさせり。こころさすものかならす心地を開明することおほし。これ世務の佛法をさまたけさるおのつからしられたり。國家に眞實の佛法弘通すれは。諸佛諸天

ひまなく衛護するかゆゑに。王化太平なり。聖化太平なれは。佛法そのちからをうるものなり。又釋尊の在世には。逆人邪見みちをえき。祖師の會下には。獵者樵翁さとりをひらく。いはんやそのほかの人をや。たた正師の教道をたつぬへし。」とふていはく。この行は。いま末代惡世にも修行せは證をうへしや。しめしていはく。教家に名相をことととせるに。なほ大乘實教には。正像末法をわくことなし。修すれはみな得道すといふ。いはんやこの單傳の正法には。入法出身。おなしく自家の財珍を受用するなり。證の得否は。修せんものおのつからしらんこと。用水の人の冷煖をみつからわきまふるかことし。」とふていはく。あるかいはく。佛法には卽心是佛のむねを了達しぬるかことときは。くちに經典を誦せす。身に佛道を行せされとも。あへて佛法にかけたるところなし。たた佛法はもとより自己にありとしる。これを得道の全圓とす。このほかさらに�, 他人にむかひてもとむへきにあらす。いはんや坐禪辨道をわつらはしくせんや。しめして

いはく。このことはもともはかなし。もしなんちかいふことくならは。こころあらんもの。たれかこのむねをしへんにしることなからん。しるへし佛法はまさに自他の見をやめて學するなり。もし自己卽佛としるをもて得道とせは。釋尊むかし化道にわつらはし。しはらく古德の妙則をもてこれを證すへし。むかし則公監院といふ僧法眼禪師の會中にありしに。法眼禪師とふていはく。則監寺なんちわか會にありていくはくのときそ。則公かいはくわれ師の會にはんへりて。すでに三年をへたり。禪師のいはく。なんちはこれ後生なり。なんそつねにわれに佛法をとはさる。則公かいはく。それかし和尚をあさむくへからす。かつて靑峰禪師のところにありしとき。佛法におきて安樂のところを了達せり。禪師のいはく。なんちいかなることはによりてかいることをえし。則公かいはく。それかしかつて靑峰にとひき。いかなるかこれ學人の自己なる。靑峰のいはく。丙丁童子來求火。法眼のいはく。よきことはなり。たたしおそらくは

なんち會せさらんことを。則公かいはく。丙丁は火に屬す。火をもてさらに火をもとむ。自己をもて自己を求むるにたりと會せり。禪師のいはく。まことにしりぬなんち會せさりけり。佛法もしかくのごとくならは。けふまてにつたはれし。ここに則公燥悶してすなはちたちぬ。中路にいたりておもひき禪師はこれ天下の善知識。又五百人の大導師なり。わか非をいさむる。さためて長處あらん。禪師のみもとにかへりて。懺悔禮謝してとふていはく。いかなるかこれ學人の自己なる。禪師のいはく。丙丁童子來求火と。則公このことはのしたにおほきに佛法をさとりき。あきらかにしりぬ自己卽佛の領解をもて佛法をしれりといふにはあらすといふことを。もし自己卽佛の領解を佛法とせは。禪師さきのことはをもてみちひかし。又しかのごとくいましむへからす。たたまさにはしめ善知識をみんより。修行の儀則を咨問して。一向に坐禪辨道して。一知半解を心にとゝむることなかれ。佛法の妙術それむなしからじ。とふていはく。

一本畫上に思字あり

乾唐の古今をきくに。あるひはたけのこゑをききて道をさとり。あるひははなのいろをみてこころをあきらむるものあり。いはんや釋迦大師は。明星をみしとき道を證し。阿難尊者は。刹竿のたふれしところに法をあきらめしのみならす。六代よりのち。五家のあひたに。一言半句のしたに。心地をあきらむるものおほし。かれらかならすしもかつて坐禪辨道せるもののみならんや。しめしていはく。古今に見色明心し。聞聲悟道せし當人。ともに辨道に擬議量なく直下に第二人なきことをしるへし。」とふていはく。西天および神丹國は。人もとより質直なり。中華のしからしむるによりて。佛法を教化するにいとはやく會入す。我朝はむかしより人に仁智すくなくして。正種つもりかたし。番夷のしからしむるうらみさらんや。又このくにの出家人は大國の在家人にもおとれり。擧世おろかにして心量狹少なり。ふかく有爲の功を執して。事相の善をこのむ。かくのごとくのやから。たとひ坐禪すといふともたちまちに佛法を證得せん

や。しめしていはく。いふかことし。わかくにの人いまた仁智あまねからす。人また迂曲なり。たとひ正直の法をしめすとも。甘露かへりて毒となりぬへし。名利にはおもむきやすく。惑執とらけかたし。しかはあれとも佛法に證入すること。かならすしも人天の世智をもて出世の舟航とするにはあらす。佛在世にもてまりによりて四果を證し。袈裟をかけて大道をあきらめし。ともに愚暗のやから。癡狂の畜類なり。たたし正信のたすくるところ。まとひをはなるるみちありまた癡老の比丘默坐せしをみて。設齋の信女さとりをひらきし。これ智によらす。文によらす。ことはをまたすかたりをまたす。たたしこれ正信にたすけられたり。また釋教の三千界にひろまること。わつかに二千餘年の前後なり。刹土のしなしなるかならすしも仁智のくににあらす。人またかならすしも利智聰明のみあらんや。しかあれとも如來の正法。もとより不思議の大功德力をそなへて。ときいたれはその刹土にひろまる。人まさに正信修行すれは。利鈍をわかす。ひとしく得道するなり。わか朝は仁智のくににあらす。人に知解おろかなりとして。佛法を會すへからすとおもふことなかれ。いはんや人みな般若の正種ゆたかなり。たた承當することまれに。受用することいまたしきならし。

さきの問答往來し。賓主相交することみたりかはし。いくはくかはなきそらにはなをなさしむる。しかあれともこのくに坐禪辨道におきて。いまたその宗旨つたはれす。しらんとこころささんもの。かなしむへし。このゆゑにいささか異域の見聞をあつめ。明師の眞訣をしるしとめて。參學のねかはんにきこえんとす。このほか叢林の規範。およひ寺院の格式。いましめすにいとまあらす。又草草にすへからす。」おほよそ我朝は龍海の以東にところして。雲煙はるかなれとも。欽明用明の前後より。秋方の佛法東漸する。これすなはち人のさいはひなり。しかあるを名相事緣しけくみたれて。修行のところにわつらふ。いまは破衣綴盂を生涯として。青巖白石のほとり

に茅をむすんで端坐修練するに。佛向上の事たちまちにあらはれて。一生參學の大事。すみやかに究竟するものなり。これすなはち龍牙の誡敕なり。雞足の遺風なり。その坐禪の儀則は。すきぬる嘉祿のころ撰集せし普勸坐禪儀に依行すへし。」それ佛法を國中に弘通すること。王敕をまつへしといへとも。ふたたひ靈山の遺屬をおもへは。いま百萬億刹に現出せる。王公相將。みなともにかたしけなく佛敕をうけて夙生に佛法を護持する素懷をわすれす。生來せるものなり。その化をしくさかひ。いつれのところか。佛國土にあらさらん。このゆゑに佛祖の道を流通せん。かならすしもところをえらひ緣をまつへきにあらす。たたけふをはしめとおもはんや。しかあれはすなはちこれをあつめて。佛法をねかはん哲匠。あはせて道をとふらひ雲遊萍寄せん。參學の眞流にのこす。ときに

寛喜辛卯中秋日

入宋傳法沙門道元記

正法眼藏辨道話

正法眼藏摩訶般若波羅蜜

觀自在菩薩の行深般若波羅蜜多時は。渾身の照見五蘊皆空なり。五蘊は色受想行識なり。五枚の般若なり。照見これ般若なり。この宗旨の開演現成するにいはく。色卽是空なり。空卽是色なり。色是色なり。空卽空なり。百艸なり。萬象なり。般若波羅蜜十二枚。これ十二入なり。また十八枚の般若あり。眼耳鼻舌身意色聲香味觸法。および眼耳鼻舌身意識等なり。また四枚の般若あり。苦集滅道なり。また六枚の般若あり。布施。淨戒。安忍。精進。靜慮。般若なり。また一枚の般若波羅蜜而今現成せり。阿耨多羅三藐三菩提なり。また般若波羅蜜三枚あり。過去現在未來なり。また般若六枚あり。地水火風空識なり。また四枚の般若。よのつねにおこなはる行住坐臥なり。

釋迦牟尼如來會中。有一苾芻。竊作是念。我應敬禮甚深般若波羅蜜多。此中雖無諸法生滅。而有戒蘊。定蘊。慧蘊。解脫蘊。知見蘊施設可得。亦有預流果。一來果。不還果。阿羅漢果施設可得。亦有獨覺菩提施設可得。亦

（編本知の上に解見の二字あり）

有無上正等菩提施設可得。亦有佛法僧寶施設可得。亦有轉妙法輪。度有情類施設可得。佛知其念告苾芻言。如是如是。甚深般若波羅蜜。微妙難測。而今の一苾芻の竊作是念は。諸法を敬禮するところに。雖無生滅の般若。これ敬禮なり。この正當敬禮時。ちなみに施設可得の般若現成せり。いはゆる戒定慧乃至度有情類等なり。これを無といふ。無の施設。かくのごとく可得なり。これ甚深微妙難測の般若波羅蜜なり。

天帝釋問具壽善現言。大德。若菩薩摩訶薩。欲學甚深般若波羅蜜多。當如何學。善現答言。憍尸迦。若菩薩摩訶薩。欲學甚深般若波羅蜜多。當如虛空學。しかあれは學般若これ虛空なり虛。空は學般若なり。

天帝釋復白佛言。世尊。若善男子善女人等。於此所說甚深般若波羅蜜多。受持讀誦。如理思惟。爲他演說。我當云何而爲守護。唯願世尊垂哀示教。爾時具壽善現謂天帝釋言。憍尸迦汝見有法可守護不。天帝釋言。不也大德。我不見有法是可守護。善現言。憍尸迦。若善男子。善女人等。作如

是說。甚深般若波羅蜜多。卽爲守護。若善男子。善女人等。作如所說。甚深般若波羅蜜多。常不遠離。當知一切人非人。伺求其便。欲爲損害。終不能得。憍尸迦。若欲守護。作如所說。甚深般若波羅蜜多。諸菩薩者。無異爲欲守護虛空。しるへし受持讀誦如理思惟。すなはち守護般若なり。欲守護は受持讀誦等なり。

一本禮敬の下に思惟の二字あり

先師古佛云。渾身似口掛虛空。不問東西南北風。一等爲佗談般若。滴丁東了滴丁東。これ佛祖嫡嫡の談般若なり。渾身般若なり。渾佗般若なり。渾自般若なり。渾東西南北般若なり。

釋迦牟尼佛言。舍利子。是諸有情。於此般若波羅蜜多。應如佛住。供養禮敬。思惟。般若波羅蜜多。應如供養禮敬佛薄伽梵。所以者何。般若波羅蜜多。不異佛薄伽梵。佛薄伽梵。不異般若波羅蜜多。般若波羅蜜多。卽是佛薄伽梵。佛薄伽梵。卽是般若波羅蜜多。何以故。舍利子。一切如來應正等覺。皆由般若波羅蜜多。得出現故。舍利子。一切菩薩摩訶薩。獨覺。阿羅漢。不還。一來。預流等。皆由般若波羅蜜多。得出現故。舍利子。一切世間十善業道。四靜慮。四無色定。五神通。皆由般若波羅蜜多。得出現故。しかあれはすなはち佛薄伽梵は。般若波羅蜜多なり。般若波羅蜜多は。是諸法なり。この諸法は空相なり。不生不滅なり。不垢不淨。不增不減なり。この般若波羅蜜多の現成せるは。佛薄伽梵の現成せるなり。問取すへし。參取すへし。供養禮敬するこれ佛薄伽梵に奉覲承事するなり。

一本靜慮の下に四無量の三字あり

奉覲承事の佛薄伽梵なり。

正法眼藏摩訶般若波羅蜜

爾時天福元年。夏安居日。在觀音導利院示衆。

寛元二年。甲辰。春三月廿一日。在越宇吉峰精舍侍者寮。書寫之。

正法眼藏現成公案

諸法の佛法なる時節。すなはち迷悟あり。修行あり。生あり死あり。諸佛あり。衆生あり。萬法ともにわれにあらざる時節。まとひなく。さとりなく。諸佛なく。衆生なく。生なく滅なし。佛道もとより豐儉より跳出せるゆゑに。生滅あり。迷悟あり。生佛あり。しかもかくのごとくなりといへども。華は愛惜にちり。艸は棄嫌におふるのみなり。自己をはこひて萬法を修證するを迷とす。萬法すすみて自己を修證するはさとりなり。迷を大悟するは諸佛なり。悟に大迷なるは衆生なり。さらに悟上に得悟する漢あり。迷中又迷の漢あり。諸佛のまさしく諸佛なるときは。自己は諸佛なりと覺知することをもちゐず。しかあれども證佛なり。佛を證しもてゆく。身心を擧して色を見取し。身心を擧して聲を聽取するに。したしく會取すれともかかみにかけをやとすかことくにあらす水と月とのことくにあらす。一方を證するときは一方はくらし。佛道をならふといふは。自己をならふな

り。自己をならふといふは。自己をわするるなり。自己をわするるといふは。萬法に證せらるるなり。萬法に證せらるるといふは。自己の身心。および他己の身心をして脫落せしむるなり。悟迹の休歇なるあり。休歇なる悟迹を長長出ならしむ。人はしめて法をもとむるときは。はるかに法の邊際を離却せり。法すでにおのれに正傳するとき。すみやかに本分人なり。人舟にのりてゆくに。目をめくらしてきしをみれば。きしのうつるとあやまる。めをしたしくふねにつくれば。ふねのすすむをしるかことく。身心を亂想して。萬法を辨肎するに。は。自心自性は常住なるかとあやまる。もし行李をしたしくして。箇裏に歸すれは。萬法のわれにあらぬ道理あきらけし。たککはは。となる。さらにかへりてたککとなるへきにあらす。しかあるを灰はのち薪はさきと見取すへからす。しるへし薪は薪の法位に住して。さきありのちあり。前後ありといへとも。前後際斷せり。灰は灰の法位にありて。後あり先あり。かの薪はいとなりぬるのち。さらに薪

一本ぬれすにものあり字上に水の下も亦字にあり

とならさるかことく。人のしぬるのちさらに生とならす。しかあるを生の死になるといはさるは。佛法のさたまれるならひなり。このゆゑに不生といふ。死の生にならさる。法輪のさたまれる佛轉なり。このゆゑに不滅といふ。生も一時のくらゐなり。死も一時のくらゐなり。たとへは冬と春とのことし。冬の春となるとおもはす。春の夏となるといはぬなり。人の悟をうる。水に月のやとるかことし。月ぬれす。水やふれす。ひろくおほきなる光にてあれと。尺寸の水にやとり。全月も彌天もくさの露にもやとり。一滴の水にもやとる。悟の人をやふらさること。月の水をうかたさるかことし。人の悟を罣礙せさること。滴露の天月を罣礙せさるかことし。ふかきことはたかき分量なるへし。時節の長短は。大水小水を撿點し天月の廣狹を辨取すへし。身心に法いまた參飽せさるには。法すてにたれりとおほゆ。法もし身心に充足すれは。ひとかたはたらすとおほゆるなり。たとへは船にのりて山なき海中にいてて。四方をみるに。たたまろにのみみゆ。さらにことなる相みゆることなし。しかあれとこの大海。まろなるにあらす方なるにあらす。のこれる海德。つくすへからさるなり。宮殿のことし。瓔珞のことし。たたわかまなこのおよふところ。しはらくまろにみゆるのみなり。かれかことく。萬法もまたしかあり。塵中格外。おほく樣子を帶せりといへとも。參學眼力のおよふはかりを見取會取するなり。萬法の家風をきかんには。方圓とみゆるよりほかに。のこりの海德山德おほくきはまりなく。よもの世界あることをしるへし。かたはらのみかくのことくあるにあらす。直下も一滴もしかあるとしるへし。魚の水を行に。ゆけとも水のきはなく。鳥そらをとふに。とふといへともそらのきはなし。しかあれとも魚鳥いまたむかしよりみずそらをはなれす。ただ用大のときは使大なり。要小のときは使小なり。かくのことくして頭頭に邊際をつくさすといふことなく。處處に蹈翻せすといふことなしといへとも。鳥もしそらをいつれは。たちまちに死す。魚もし水をいつれは。た

要一本に用に作る

ちまちに死す。以水爲命しりぬへし。以空爲命しりぬへし。以鳥爲命あり。以魚爲命あり。以命爲鳥なるへし。以命爲魚なるへし。このほかさらに進歩あるへし。修證ありそのの壽者命者あることかくのことし。しかあるを水をきはめそらをきはめてのち水そらをゆかんと擬する鳥魚あらんは。水にもそらにも。みちをうへからす。ところをうへからす。このところをうれは。この行李したかひて現成公案なり。このみち。このみちをうれは。この行李したかひて現成公案す。このところ。大にあらす小にあらす。自にあらす佗にあらす。さきよりあるにあらす。いま現するにあらさるかゆゑに。かくのことくあるなり。しかあるかことく人もし佛道を修證するに。得一法通一法なり。遇一行修一行なり。これにところあり。みち通達せるによりて。しらるるきはのしるからさるは。このしることの佛法の究盡と同生し同參するゆゑにしかあるなり。得處かならす自己の知見となりて慮知にしられんするとならふことなかれ。證究すみやかに現成

一本建長等六字無し

すといへとも。密有かならすしも見成にあらす。見成これ何必なり」。麻谷山寶徹禪師。あふきをつかふ。ちなみに僧きたりてとふ。風性常住無處不周なり。なにをもてかさらに和尚あふきをつかふ。師いはく。なんちたた風性常住をしれりとも。いまたところとしていたらすといふことなき道理をしらすと。僧いはく。いかならんかこれ無處不周底の道理。ときに師あふきをつかふのみなり。僧禮拜す。佛法の證驗。正傳の活路。それかくのことし。常住なれはあふきをつかふへからす。つかはぬおりも風をきくへきといふは。常住をもしらす。風性をもしらぬなり。風性は常住なるかゆゑに。佛家の風は大地の黄金なるを現成せしめ。長河の酥酪を參熟せり。

正法眼藏現成公案

これは天福元年中秋のころ。かきて鎮西の俗弟子楊光秀にあたふ。

建長壬子拾勒

正法眼藏一顆明珠

婆婆世界大宋國福州玄沙山院宗一大師。法諱師備。俗姓者謝なり。在家のそのかみ釣魚を愛し。舟を南臺江にうかべて。もろもろのつり人にならひけり。不釣自上の金鱗を不待にもありけん。唐の感通のはしめたちまちに出塵をねがふ。舟をすてて山にいる。そのとし三十歳になりけり。浮世のあやうきをさとり。佛道の高貴をしりぬ。つひに雪峰山にのぼりて。眞覺大師に參して。晝夜に辨道す。あるときあまねく諸方を參徹せんため。蓑をたつさへて出嶺するちなみに。脚指を石に築著して。流血し痛楚するに。忽然として猛省していはく。是身非有。痛自何來。すたはち雪峰にかへる。雪峰とふ那箇是備頭陀。玄沙いはく。終不敢誑於人。このことはを。雪峰ことに愛していはく。たれか。このことはをもたさらん。たれかこのことはを道得せん。雪峰さらにとふ備頭陀なんそ徧參せさる。師いはく。達磨不來東土。二祖不往西天といふに。雪峰ことにほめき。ひころはつりする人に

福本沙の下に山字無し

福本たのにめの下にあり

福本天下にといふにの四字無し

てあれは。もろもろの經書ゆめにもかつていまたみさりけれとも。こころさしのあさからぬをさきとすれは。かたへにこゆる志氣あらはれけり。雪峰も衆のなかにすくれたりとおもひて。門下の角立なりとほめき。衣は布をもちゐひとつをかへさりけれは。もつつりにつつれりけり。はたへには紙衣をもちゐけり。叉艸をもきけり。雪峰に參するほかは。自餘の知識をとふらはさりけり。しかあれともまさに師の法を嗣するちから辨取せりき。つひにみちをえてのち。人にしめすにいはく。盡十方世界是一箇明珠。ときに僧問。承和尚有言。盡十方世界是一顆明珠。學人如何會得。師曰。盡十方世界是一顆明珠。用會作麼。師來日却問其僧。盡十方世界是一顆明珠。汝作麼生會。僧曰。盡十方世界是一顆明珠。用會作麼。師曰。知汝向黑山鬼窟裏作活計。いま道取する盡十方世界是一顆明珠。はしめて玄沙にありそのの宗旨は。盡十方世界は。廣大にあらす。微小にあらす。方圓にあらす。中正にあらす。活鱍鱍にあらす。露廻廻にあらす。さらに生死去來に

廻廻一本に迴に迴に作る

福本珠の上に明の字あり次下同し

福本現の下に前の字無し

あらさるゆゑに。生死去來なり。恁麼のゆゑに。昔日曾此去にして。而今從此來なり。究辨するにたれか片片なりと見徹するあらん。たれか兀兀なりと撿擧するあらん。盡十方といふは。逐物爲己。逐己爲物の未休なり。情生智隔を隔と道取する。これ回頭換面なり。展事投機なり。逐己爲物のゆゑに。未休なる盡十方なり。機先の道理なるゆゑに。機要の管得にあまれることあり。是一顆珠は。いまた名にあらされとも道得なり。これを名に認しきたることあり。一顆珠は。直須萬年なり。亘古未了なるに。亘今到來なり。身今あり心今ありといへとも。明珠なり。彼此の艸木にあらす。乾坤の山河にあらす。明珠なり」。學人如何會得。この道取は。たとひ僧の弄業識に相似せりとも。大用現前。是大軌則なり。すすみて一尺水一尺波を突兀ならしむへし。いはゆる一丈珠一丈明なり」。いはゆるの道得を道取するに。玄沙の道は。盡十方世界是一顆明珠用會作麼なり。この道取は。佛は佛に嗣し。祖は祖に嗣す。玄沙は玄沙に嗣する道得なり。嗣せさらんと廻避せん

に廻避のところなかるへきにあらされとも。しはらく灼然廻避す。るも。道取生あるは。現前の蓋時節なり」。玄沙。來日問其僧。盡十方世界是一顆明珠。汝作麼生會。これは道取す」。昨日說定法なる。今日二枚をかりて出氣す」。今日說不定法なり。推倒昨日點頭笑なり」。僧曰。盡十方世界是一顆明珠。用會作麼。いふへし騎賊馬逐賊なり。古佛爲汝說するには。異類中行なり。しはらく回光返照すへし。幾箇枚の用會作麼かある。試道するには。乳餅七枚。菜餅五枚なりといへとも。湘之南潭之北の教行なり」。玄沙曰。知汝向黑山鬼窟裏作活計。しるへし日面月面は。往古よりいまた不換なり。日面は日面とともに共出す。月面は月面とともに共出するゆゑに。若六月道正是時。不可道我性熱也なり。しかあれはすなはちこの明珠の有如無始は。無端なり。盡十方世界一顆明珠なり。兩顆三顆といはす。全身これ一隻の正法眼なり。全身これ眞實體なり。全身これ一句なり。全身これ光明なり。全身これ全身なり。全身のとき全身の罣礙なし。圓陀陀地なり。轉轆轆なり。明

福本界の上に世の字無し

福本作下に もの字無し

珠の功德。かくのごとく見成なるゆゑに。いまの見色聞聲の觀音彌勒あり。現身說法の古佛新佛あり。正當恁麼時。あるひは虛空にかかり。衣裏にかかる。あるひは頷下にをさめ。髻中にをさむる。みな盡十方世界一顆明珠なり。ころものうらにかかるを樣子とせり。おもてにかけんと道取することなかれ。髻中頷下にかかるを樣子とせり。髻表頷表に弄せんと擬することなかれ。醉酒の時節にたまをあたふる親友あり。親友にはかならすたまをあたへし。たまをかけらるる時節。かならす醉酒するなり。既是恁麼は。盡十方界にてある一顆明珠なり。しかあれはすなはち轉不轉のおもてをかへゆくにたれとも。すなはち明珠なり。まさにたまはかくありけるとしるすなはちこれ明珠なり。明珠はかくのごとくきこゆる聲色あり。既得恁麼なるには。われは明珠にはあらしとたとらるるはたまにはあらしとうたがはさるへきなり。たとりうたがい取舍する作無作も。たたしはらく小量の見なり。さらに小量に相似ならしむるのみなり。愛せさらんや。明珠かくのごとくの彩光きはまりなきなり。彩彩光光の片片條條は。盡十方界の功德なり。たれかこれを攙奪せん。行市に輒をなくる人あらす。六道の因果に不落有落をわつらふことなかれ。不昧本來の頭正尾正なる。明珠は面目なり。明珠は眼睛なり。しかあれともわれもなんちもいかなるかこれ明珠。いかなるかこれ明珠にあらさるとしらさる。百思百不思は。明明の艸料をむすひきたれとも。玄沙の法道によりて。明珠なりける身心の樣子をもききしりあきらめつれは。心これわたくしにあらす。起滅をたれとしてか。明珠なり明珠にあらさると取舍にわつらはん。たとひたとりわつらふも明珠にあらぬにあらす。明珠にあらぬかありておこさせける行にも念にもにてはあらされは。たたまさに黑山鬼窟の進歩退歩。これ一顆明珠なるのみなり。

さる福本すに作る

正法眼藏一顆明珠

爾時嘉禎四年四月十八日在雍州宇治縣觀音導利興聖寶林寺示

衆

寛元元年癸卯閏七月二十三日書寫于越州吉田郡志比莊吉峰寺

院主房侍者比丘懐奘

正法眼藏重雲堂式

一　道心ありて名利をなけすてんひといるへし。いたつらに。まことなからんもの。いるへからす。あやまりていれりとも。かんがへていだすへし。しるへし道心ひそかにをこれは。名利たちどころに解脱するものなり。おほよそ大千界のなかに。正嫡の付屬まれなり。わかくにむかしよりいまこれを本源とせん。のちをあはれみて。いまをおもくすへし。

一　堂中の衆は乳水のことくに和合して。たがひに道業を一興すへし。いまは。しはらく賓主なりとも。のちにはなかく佛祖なるへし。しかあれはすなはち。おのおのともにあひかたきにあひて。をこなひかたきをこなふ。まことのおもひをわするることなかれ。これを佛祖の身心といふ。かならす佛となり祖となる。すてに家をはなれ。里をはなれ。雲をたのみ。水をたのむ。身をたすけ。道をたすけむこと。この衆の恩は父母にもすくるへし。父母はしはら

然一本に燃に作る

く生死のなかの親なり。この衆はなかく佛道のともにてあるへし。

一　ありきをこのむへからす。たとひ切要には一月に一度をゆるす。むかしのひと。とをき山にすみ。はるかなる。はやしに。をこなふし。人事まれなるのみにあらす。萬縁ともにすつ。韜光晦跡せしこころをならふへし。いまはこれ頭然をはらふときなり。このときをもて。いたつらに世縁にめくらさむなけかさらめや。なけかさらめやは。無常たのみかたし。しらす露命いかなるみちのくさにかをちむ。まことにあはれむへし。

一　堂のうちにて。たとひ禪册なりとも文字をみるへからす。堂にしては究理辨道すへし。明窓下にむかふては古致照心すへし。す陰すつることなかれ。專一に功夫すへし。

一　おほよそ。よるも。ひるも。さらむところをは。堂主にしらすへし。ほしいままに。あそふことなかれ。衆の規矩にかかはるへし。しらす今生のおはりにてもあるらむ。閑遊のなかにいのちをおはん。さためてのちにくやしからん。

一　佗人の非に手かくへからす。にくむこころにて。ひとの非をみるへからす。不見佗非我是。自然上敬下恭の。むかしのことはあり。またひとの非をならふへからす。わか德を修すへし。ほとけも非を制することあれとも。にくめとにはあらす。

一　大小の事。かならす堂主にふれて。をこなふへし。堂主にふれすして。ことををこなはんひとは。堂をいたすへし。賓主の禮みたれは。正偏あきらめかたし。

一　堂のうちならひにその近邊にて。こゑをたかくし。かしらをつどえて。ものいふへからす。堂主これを制すへし。

一　堂のうちにて行道すへからす。

一　堂のうちにて珠數もつへからす。手をたれて。いていりす。すへか

一　堂のうちにて。念誦看經すへからす。檀那の一會の看經を請せんはゆるす。

一　堂のうちにてはなたかくかみ。つばきたかくはくへからす。道業のいまた通達せさることをかなしむへし。光陰のひそかにうつり。行道のいのちをうばふことを。をしむへし。をのつから少水のうをのこころあらむ。

一　堂の衆あやおりものをきるへからす。かみぬの。などをきるへし。むかしより道をあきらめしひと。みなかくのことし。

一　さけにゑひて。堂中にいるへからす。わすれてあやまらんは。禮拜懺悔すへし。またさけをとりいるへからす。にらぎのかして堂中にいるへからす。

一　いさかひせんものは。二人ともに下寮すへし。みつから道業をさまたくるのみにあらす。佗人をもさまたくるゆへに。いさかはんをみて制せざらんものも。をなしく。とがあるへし。

一　堂中のをしへにかかはらさらんは。諸人をなしこころにて擯出すへし。をかしと。をなじこころにあらんは。とがあるへし。

一　僧俗を堂内にまねきて。衆を起動すへからす。近邊にても賓客と。ものいふこゑ。たかくすへからす。ことさら修練自稱して。供養をむさぼることなかれ。ひさしく參學のこころざしあらむか。あなかちに巡禮のあらむはいるへし。そのときもかならす堂主にふるへし。

一　坐禪は僧堂のことくにすへし。朝參暮請いささかも。をこたることなかれ。

一　齋粥のとき。鉢盂の具足を地にをとさんひとは。叢林の式によりて罰油あるへし。

一　おほよそ佛祖の制誡をは。あながちにまほるへし。叢林の清規はほねにも銘すへし。心にも銘すへし。

一　一生安穩にして辨道無爲にあらむと。ねかふへし。

以前の數條は。古佛の身心なり。うやまひしたかふへし。

曆仁二年己亥四月二十五日。觀音導利興聖護國寺重雲堂式終

觀音導利興聖護國寺開闢沙門道元示。

爾時の堂主宗信。この文をうつして。のちにつたふるなり。ゆゑに近代流布の本のおはりに。堂主宗信の四字をのするものあり。しかあれとも。撰者にあらさることしるへきなり。

正法眼藏卽心是佛

佛佛祖祖。いまたまぬかれす保任しきたれるは。卽心是佛のみなり。しかあるを西天には卽心是佛なし。震旦にはしめてきけり。學者おほくあやまるによりて。將錯就錯せす。將錯就錯せさるゆゑに。おほく外道に零落す。いはゆる卽心の話をききて。癡人おもはくは。衆生の慮知念覺の未發菩提心なるをすなはち佛とすとおもへり。これはかつて正師にあはさるによりてなり。外道のたくひとなるといふは。西天竺國に外道あり先尼となつく。かれか見處のいはくは。大道はわれらかいまの身にあり。そのていたらくは。たやすくしりぬへし。いはゆる苦樂をわきまへ。冷煖を自知し。痛癢を了知す。萬物にさへられす。諸境にかかはれす。物は去來し。境は生滅すれとも。靈知はつねにありて不變なり。この靈知ひろく周遍せり。凡聖含靈の隔異なし。そのなかにしはらく妄法の空華ありといへとも。一念相應の智慧あらはれぬれは。物も亡し境も滅しぬれは。靈知本性ひとり

了了として鎮常なりたとひ身相はやふれぬれとも靈知はやふれすしていつるなりたとへは人舍の失火にやくるに舍主いててさるかことし昭昭靈靈としてある これを覺者知者の性といふこれをほとけともいひさとりとも稱す自佗おなしく具足し迷悟ともに通達せり萬法諸境ともかくもあれ靈知は境とともならす物とおなしからす歴劫に常住なり いま現在せる諸境も靈知の所在によらは眞實といひぬへし本性より緣起せるゆゑには實法なりたとひしかありとも靈知のことくに常住ならす存沒するかゆゑに明暗にかかはれす靈知するかゆゑに これを靈知といふまた眞我と稱し覺元といひ本性と稱し本體と稱す かくのことくの本性をさとるを常住にかへりぬるといひ歸眞の大士といふ これよりのちはさらに生死に流轉せす不生不滅の性海に證入するなり この ほかは眞實にあらす この性あらはささるほと三界六道は競起するといふなり これすなはち先尼外道か見なり 大唐國大證國師慧

傳燈之是に作る　傳燈に爲字なし　傳燈第八卷所載　一本近代以下百二十五字無し

忠和尚問僧從何方來 僧曰南方來 師曰南方有何知識 僧曰知識頗多 師曰如何示人 僧曰彼方知識直下示學人卽心是佛 佛是覺義 汝今悉具見聞覺知之性 此性善能揚眉瞬目去來運用 徧於身中 搖頭頭知 搖脚脚知 故名正徧知 離此之外更無別佛 此身卽有生滅 心性無始以來未曾生滅 身生滅者如龍換骨似蛇脫皮人出故宅 卽身是無常 其性常也 南方所說大約如是 師曰若然者與彼先尼外道無有差別 彼云我此身中有一神性 此性能知痛癢 身壞之時神則出去 如舍被燒舍主出去 舍卽無常 舍主常矣 審如此者邪正莫辨 孰爲之乎 吾比遊方多見此色 近尤盛矣 聚却三五百衆目視雲漢 云是南方宗旨 把佗壇經改換添糅 鄙譚削除聖意惑亂後徒 豈成言教 苦哉吾宗喪矣 若以見聞覺知是爲佛性者 淨名不應云法離見聞覺知 若行見聞覺知是則見聞覺知非求法也 大證國師は曹溪古佛の上足なり 天上人間の大善知識なり 國師のしめす宗旨をあきらめて 參學の龜鑑とすへし 先尼外道か見處としりて したかふことなかれ 近代大宋國に諸山の主人とある

やから國師のことくなるはあるへからすむかしより國師にひとしかるへき知識いまたかつて出世せすしかあるに世人あやまりておもはく臨濟德山も國師にひとしかるへしとかくのことくのやからのみおほしあはれむへし明眼の師なきことをいはゆる佛祖の保任する卽心是佛は外道二乘のゆめにもみるところにあらす唯佛祖與佛祖のみ卽心是佛しきたり究盡しきたる聞著あり行取あり證著あり佛百艸を拈却しきたり打失しきたるしかあれとも丈六の金身に說似せす卽公案あり見成を相待せす敗壞を廻避せす是三界あり退出にあらす唯心にあらす心牆壁あり いまた泥水せす いまた造作せす あるひは卽心是佛を參究し心卽佛是を參究し佛卽是心を參究し卽心佛是を參究し是佛心卽を參究す かくのことくの參究 まさしく卽心是佛 これを擧して卽心是佛に正傳するなり かくのことく正傳して今日にいたれり いはゆる正傳しきたれる心といふは一心一切法 一切法一心なり このゆゑに古人

いはく若人識得心大地無寸土しるへし心を識得するとき蓋天撲落し市地裂破す あるひは心を識得すれは大地さらにあつさ三寸をます 古德云作麼生是妙淨明心 山河大地 日月星辰 あきらかにしりぬ心とは山河大地なり 日月星辰なり しかあれともこの道取するところすすめは不足あり しりそくれはあまれり 山河大地心は 山河大地のみなり さらに波浪なし風煙なし 日月星辰心は日月星辰のみなり さらにきりなしかすみなし 生死去來心は生死去來のみなり さらに迷なし悟なし 牆壁瓦礫心は牆壁瓦礫のみなり さらに泥なし水なし 四大五蘊心は四大五蘊のみなり さらに馬なし猿なし 椅子拂子心は椅子拂子のみなり さらに竹なし木なし かくのことくなるかゆゑに卽心是佛 不染汚卽心是佛なり 諸佛不染汚諸佛なり しかあれはすなはち卽心是佛とは發心修行菩提涅槃の諸佛なり いまた發心修行菩提涅槃せさるは卽心是佛にあらす たとひ一刹那に發心修證するも卽心是佛なり たとひ一極微中に發心

市一本に匝に作る

稲本地心の下にとの字あり

修證するも。卽心是佛なり。たとひ無量刼に發心修證するも。卽心是佛なり。たとひ一念中に發心修證するも。卽心是佛なり。たとひ半拳裏に發心修證するも。卽心是佛なりしかあるを長劫に修行作佛するは。卽心是佛にあらすといふは。卽心是佛をいまたみさるなり。いまたしらさるなり。いまた學せさるなり。卽心是佛を開演する正師をみさるなり。いはゆる諸佛とは。釋迦牟尼佛なり。釋迦牟尼佛。これ卽心是佛なり。過去現在未來の諸佛。ともにほとけとなるときは。かならす釋迦牟尼佛となるなり。これ卽心是佛なり。

正法眼藏卽心是佛

爾時延應元年五月二十五日在雍州宇治郡觀音導利興聖寳林寺示衆

正法眼藏洗淨

（淨心の法あり清本心にあり心あるに作る）

佛祖の護持しきたれる修證あり。いはゆる不染汙なり。

南嶽山觀音院大慧禪師。因六祖問。還假修證不。大慧云。修證不無。染汙卽不得。六祖云。只是不染汙。諸佛之所護念。汝亦如是。吾亦如是。乃至西天祖師亦如是。云云。

大比丘三千威儀經云。淨身者。洗大小便。剪十指爪。　しかあれは身心これ不染汙なれとも。淨身の法あり。淨心の法あり。たた身心をきよむるのみにあらす。國土樹下をもきよむるなり。國土いまたかつて塵穢あらされとも。きよむるは。諸佛之所護念なり。佛果にいたりてなほ退せす廢せさるなり。その宗旨。はかりつくすへきことかたし。作法これ宗旨なり。得道これ作法なり。華嚴經淨行品云。左右便利。當願衆生。蠲除穢汙。無婬怒癡。已而就水。當願衆生。向無上道。得出世法。以水滌穢。當願衆生。具足淨忍。畢竟無垢。水かならすしも本淨にあらす。本不淨にあらす。本不淨にあらすしも本淨にあらす。本不淨にあらす諸

法またかくのことし。水いまた情非情にあらす。身いまた情非情にあらす。諸法またかくのことし。佛世尊の說。それかくのことし。しかあれとも水をもて身をきよむるにあらす。佛法によりて。佛法を保任するに。この儀あり。これを洗淨と稱す。佛祖の一身心をしたしくして正傳するなり。佛祖の一句子をちかく見聞するなり。佛祖の一光明をあきらかに住持するなり。おほよそ無量無邊の功德を現成せしむるなり。身心に修行を威儀せしむる。正當恁麼時。すなはち久遠の本行を具足圓成せり。このゆゑに修行の身心本現するなり。十指の爪をきるへし。十指といふは。左右の兩手の指のつめなり。足指の爪おなしくきるへし。經にいはく。つめのなかさもし一麥はかりになれは罪をうるなり。しかあれは爪をなかくすへからす。爪のなかきはおのつから外道の先蹤なり。ことさらつめをきるへし。しかあるにいま大宋國の僧家のなかに。參學眼そなはらさるともから。おほく爪をなかからしむ。あるひは一寸兩寸およひ三四寸になかきもあり。これ非法なり。佛法の身心にあらす。佛家の稽古あらさるによりてかくのことし。有道の尊宿はしかあらさるなり。あるひは長髮ならしむるともからあり。これも非法なり。大國の僧家の所作なりとして。正法ならんとあやまることなかれ。先師古佛。ふかくいましめのことはを天下の僧家の長髮長爪のともからにたまふにいはく。不會淨髮不是俗人。不是僧家。便是畜生。古來佛祖誰是不淨髮者。如今不會淨髮眞箇是畜生。かくのことく示衆するに。年來不剃頭のともから。剃頭せるおほし。あるひは上堂。あるひは普說のとき。彈指かまひすしくして責呵す。いかなる道理としらす。胡亂に長髮長爪なる。あはれむへし南閻浮の身心をして非道におけること。近來二三百年。祖師道廢せるゆゑに。しかのことくのともからおほし。かくのことくのやから。寺院の主人となり。師號に署して。爲衆の相をなす。人天の無福なり。いま天下の諸山に道心箇渾無なり。得道箇久絕なり。祇管破落黨のみなり。かくのことく普說するに。諸方に長老

の名をみたりにせるともからうらみす陳說なし。しるへし長髮は佛祖のいましむるところ。長爪は外道の所行なり。佛祖の兒孫。これらの非法をこのむへからす。身心をきよからしむへし。剪爪剃髮すへきなり。洗大小便おこたらしむることなかれ。舍利弗この法をもて外道を降伏せしむることありき。外道の本期にあらす。身子か素懷にあらされとも。佛祖の威儀現成するところに。邪法おのつから伏するなり。樹下露地に修習するときは。起屋なし。便宜の谿谷河水等によりて。分土洗淨するなり。これは灰なし。たた二七丸の土をもちゐる。二七丸をもちゐる法は。まつ法衣をぬきてたたみおきてのち。くろからす黃色なる土をとりて。一丸のおほきさ大なる大豆許に分して。いしのうへあるひは便宜のところに。七丸をひとならへにおきて。二七丸をふたへにならへおく。そののち磨石にもちゐるへき石をまうく。そののち厨す。厨後使籌。あるひは使紙。そののち水邊にいたりて洗淨する。まつ三丸の土をたつさへて洗淨す。一丸土を掌にとりて。水すこしはかりをいれて。水に合してときて。泥よりもうすく漿はかりになして。まつ小便を洗淨す。つきに一丸の土をもてさきのことくして大便處を洗淨す。つきに一丸の土をさきのことくして略して觸手をあらふ。寺舍に居してよりこのかたは。その屋を起立せり。これを東司と稱す。あるときは圊といひ廁といふときもありき。僧家の所住にかならすあるへき屋舍なり。東司にいたる法は。かならす手巾をもつ。その法は。手巾をふたへにをりて。ひたりのひちのうへにあたりて。衫袖のうへにかくるなり。すてに東司にいたりては。淨竿に手巾をかくへし。かくる法は。臂にかけたりつるかことし。もし九條七條等の袈裟を著してきたれらは。手巾にならへてかくへし。おちざらんやうに打併すへし。倉卒になけかくることなかれ。よくよく記號すへし。記號といふは。淨竿に字をかけり。白紙にかきて月輪のことく圓にして。淨竿につけ列せり。しかあるをいつれの字にわか直裰はおけりとわすれずみたらさるを。記

えに一本にへに作る

號といふなり。衆家おほくきたらんに。自佗の竿位を亂すへからす。このあひた。衆家きたりてたちつらなれは。叉手して揖すへし。揖するにかならすしもあひむかひて曲躬せす。たた叉手をむねのまへにあてて氣色ある揖なり。東司にては直裰を著せさるにも。衆家と揖し氣色するなり。もし兩手ともにいまた觸せす。兩手ともにものをひさげさるには。兩手を叉して揖すへし。もしすてに一手を觸せしめ一手にものを提せらんときは。一手にて揖すへし。一手にて揖するには。手をあふけて指頭すこしきかかめて水を掬せんとするかことくしてもちて。頭をいささか低頭せんとするかことく揖するなり。佗かくのことくせは。おのれかくのことくすへし。おのれかくのことくせは。佗またしかあるへし。褊衫および直裰を脱して手巾のかたはらにかく。かくる法は。直裰をぬきとりて。ふたつのそてをうしろえあはせて。ふたつのわきのしたをとりあはせてひきくれは。ふたつのそてかさなれる。このときは。左手にては直裰のう

えに一本にへに作る

なちのうらのもとをとり。右手にてはわきをひきあくれは。ふたつのたもとと左右の兩襟とかさなるなり。兩袖と兩襟とをかさねて。またたてさまになかよりをりて。直裰のうなちを淨竿の那邊えなけこす。直裰の裙ならひに袖口等は。竿の遮邊にかかれり。たとへは直裰の合腰淨竿にかくるなり。つきに竿にかけたりつる手巾の遮那兩端をひきちかへて。直裰よりひきこして。手巾のかからさりつるかたにて。またたちかへてむすひとともむ。兩三巾もちかへちかへしてむすひて直裰を淨竿より落地せしめさらんとなり。直裰にむかひて合掌す。つきに絆子をとりて兩臂にかく。つきに淨架にいたりて。淨桶に水をもりて。右手に提して淨廁にのほる。淨桶に水をいる法は。十分にみつることなかれ。九分を度とす。廁門のまへにして換鞋すへし。淸鞋をはきて自鞋を廁門の前に脱するなり。これを換鞋といふ。

禪苑淸規云。欲上東司應須預往。勿致臨時內逼倉卒。乃疊袈裟安寮中

扇一本に扉に作る

案上。或淨竿上。廁內にいたりて左手にて門扇を掩す。つきに淨桶の水をすこしはかり槽裏に瀉す。つきに淨桶を當面の淨桶位に安す。つきにたちなから槽にむかひて彈指三下すへし。彈指のとき。左手は拳にして左腰につけてもつなり。つきに袴口衣角ををさめて。門にむかひて兩足に槽脣の兩邊をふみて。蹲居し屎す。兩邊をけかすことなかれ。前後にそましむることなかれ。このあひた默然なるへし。隔壁と語笑し。聲をあけて吟詠することなかれ。涕唾狼藉なることなかれ。怒氣卒暴なることなかれ。壁面に字をかくへからす。廁籌をもて地面を劃することなかれ。屎退後。すへからく使籌すへし。またかみをもちゐる法あり。故紙をもちゐるへからす。字をかきたらん紙もちゐるへからす。淨籌觸籌わきまふへし。籌はなかさ八寸につくりて三角なり。ふとさは手拇指大なり。漆にてぬれるもあり。未漆なるもあり。觸は籌斗になけおき淨はもとより籌架にあり。籌架は槽のまへの版頭のほとりにおけり。使籌使紙ののち。洗淨する

一本三の上に之とのるこの三字あり

法は。右手に淨桶をもちて。左手をよくよるぬらしてのち。左手を掬につくりて水をうけて。まつ小便を洗淨す三度。つゆに大便をあらふ。洗淨如法にして浮潔ならしむへし。このあひたあらく淨桶をかたふけて。水をして手のほかにあましおとしあふれちらして。水をはやくうしなふことなかれ。洗淨しをわりて淨桶を安桶のところにおきて。つきに籌をとりてのこひかはかす。あるひは紙をもちゐるへし。大小兩處。よくよくのこひかはかすへし。つきに右手にて袴口衣角をひきつくろいて。右手に淨桶を提して廁門をいつるちなみに蒲鞋をぬきて自鞋をはく。つきに淨桶にかへりて。淨桶を木所に安す。つきに洗手すへし。右手に灰匙をとりて。まつすくひて瓦石のおもてにおきて。右手をもて滴水を點して觸手をあらふ。瓦石にあててときあらふなり。たとへはさびあるかたなを砥にあててとくかことし。かくのことく灰にて三度あらふへし。つきに土をおきて水を點してあらふこと三度すへし。つきに右手に皂莢をとりて

小桶の水にさしひたして。兩手あはせてもみあらふ。腕にいたらんとするまでもよくよくあらふなり。誠心に住して慇懃にあらふへし。灰三土三皂莢一なり。あはせて一七度を度とせり。つきに大桶にてあらふ。このときは面藥土灰等をもちゐす。たた水にても湯にてもあらふなり。一番あらひて。その水を小桶にうつして。さらにあたらしき水をいれて兩手をあらふ。

妙一本好に作る

華嚴經云。以水盥掌。當願衆生。得上妙手。受持佛法。水杓をとらんことはかならす右手にてすへし。このあひた桶杓おとをなしかまひすしくすることなかれ。水をちらし皂莢をちらし。水架の邊をぬらし。おほよそ倉卒なることなかれ。狼藉なることなかれ。つきに公界の手巾に手をのこふ。あるひはみつからか手巾にのこふ。手をのこひをはりて。淨竿のした直綴のまへにいたりて。絆を脱して竿にかく。つきに合掌してのち。手巾をとき直綴をとりて著す。つきに手巾を左臂にかけて塗香す。公界に塗香あり。香木を寶瓶形につくれり。そ

扇一本に扉に作る

の大は拇指大なり。なかさ四指量につくれり。纖索の尺餘なるをもちて。香の兩端に穿貫せり。これを淨竿にかけおけり。これを兩掌をあはせてもみあはすれはその香氣おのつから兩手に薫す。絆を竿にかくるとき。おなしくうへにかけかさねて。絆と絆とをみたらしめ亂縷せしむることなかれ。かくのことくするみなこれ淨佛國土なり。莊嚴佛國なり。審細にすへし倉卒にすへからす。いそきをはりてかへりなはやとおもひいとなむことなかれ。ひそかに東司上不説佛法の道理を思量すへし。衆家のきたりゐる面をしきりにまもることなかれ。廁中の洗淨には冷水をよろしとす。熱湯は腸風をひきおこすといふ。洗手には溫湯をもちゐるさまたけなし。釜一隻をおくことは。燒湯洗手のためなり。清規云。晚後燒湯上油。常令湯水相續。無使大衆動念。しかあれはしりぬ湯水ともにもちゐるなり。もし廁中の觸せることあらは門扇を掩して。觸牌をかくへし。もしあやまりて落桶あらは門扇を掩して。落桶牌をかくへし。これらの牌かか

れらん局にはのほることなかれ。もしさきより廁上にのほれらんに。ほかに人ありて彈指せば。しばらくいづへし」。清規云。若不洗淨。不得坐僧牀。及禮三寶。亦不得受人禮拜。三千威儀經云。若不洗大小便。得突吉羅罪。亦不得僧淨坐具上坐。及禮三寶。設禮無福德。しかあれはすなはち辨道功夫の道場。この儀をさきにすへし。あに三寶を禮せさらんや。あに人の禮拜をうけさらんや。あに人を禮せさらんや。佛祖の道場。かならすこの威儀あり。佛祖道場中人。かならすこの威儀具足あり。これ自己の强爲にあらす。威儀の云爲なり。諸佛の常儀なり。諸祖の家常なり。たた此界の諸佛のみにあらす。十方の佛儀なり。淨土穢土の佛儀なり。少聞のともからおもはくは。諸佛には廁屋の威儀あらす。娑婆世界の諸佛の威儀は。淨土の諸佛のことくにあらすとおもふ。これは學佛道にあらす。しるへし淨穢は離人の一血なり。あるときはあたたかなり。あるときはすさまし。諸佛に廁屋ありしるへし。

十誦律第十四云。羅睺羅沙彌宿佛廁。佛覺了。佛以右手摩羅睺羅頂。說是偈言。汝不爲貧窮。亦不失富貴。但爲求道故。出家應忍苦。　しかあればすなはち佛道場に廁屋あり。佛廁屋裏の威儀は洗淨なり。祖祖相傳しきたれり。佛儀のなほのこれる。慕古の慶快なり。あひかたきにあへるなり。いはんや如來かたしけなく廁屋裏にして。羅睺羅のために說法しまします。廁屋は佛轉法輪の一會なり。この道場の進止。これ佛祖正傳せり。

摩訶僧祇律第三十四云。廁屋不得在東在北。應在南在西。小行亦如是。この方宜によるへし。これ西天竺國諸精舍の圖なり。如來現在の建立なり。しるへし一佛の佛儀のみにあらす。七佛の道場なり。精舍なりはしめたるにあらす。諸佛の威儀なり。これらをあきらめさらんよりさきは。寺院を艸創し。佛法を修行せん。あやまりはおほく。佛威儀そなはらす。佛菩提いまた現前せさらん。もし道場を建立し。寺院を艸創せんには。佛祖正傳の法儀によるへし。これ正嫡正傳の法儀

によるへし。これ正嫡正傳なるかゆゑに。その功德あつめかさなれり。佛祖正傳の嫡嗣にあらされは。佛法の身心いまたしらす。佛法の身心しらされは佛家の佛業あきらめさるなり。いま大師釋迦牟尼佛の佛法。あまねく十方につたはれるといふは。佛身心の現成なり。佛身心現成の正當恁麼時かくのことし。

正法眼藏洗淨

爾時延應元年己亥冬十月二十三日在雍州宇治縣觀音導利興聖寺林寺示衆

正法眼藏禮拜得髓

修行阿耨多羅三藐三菩提の時節には。導師をうることもともかたし。その導師は。男女等の相にあらす。大丈夫なるへし。恁麼人なるへし。古今人にあらす。野狐精にして善知識ならん。これ得髓の面目なり。導利なるへし。不味因果なり。儞我渠なるへし。すてに導師を。相逢せんよりこのかたは。萬緣をなけすてて。寸陰をすこさす。精進辨道すへし。有心にても修行し。無心にても修行すへし。しかあれは頭燃をはらひ翹足を學すへし。かくのことくすれは訕謗の魔黨にをかされす。斷臂得髓の祖さらに佗にあらす。脫落身心の師すてに自なりき。髓をうること法をつたふること。必定して至誠により信心によるなり。誠心ほかよりきたるあとなく。內よりいつる方なし。たたまさに法をおもくし身をかろくするなり。世をのかれ道をすみかとするなり。いささかも身をかへりみること法よりもおもきには。法つたはれす。道うることなし。その法をおもく

を一本にに作る

する志氣。ひとつにあらす。佗の教訓をまたすといへとも。しはらく一二を擧拈すへし。いはく法をおもくするは。たとひ露柱なりとも。たとひ燈籠なりとも。たとひ諸佛なりともたとひ野干なりとも。鬼神なりとも男女なりとも。大法を保任し吾髓を汝得せるあらは。身心を牀座にして。無量劫にも奉事するなり身心はうることやすし。世界に稻麻竹葦のことし。法はあふことまれなり。釋迦牟尼佛のいはく。無上菩提を演説する師にあはんには。種姓を觀することなかれ。容顏をみることなかれ。非をきらふことなかれ。行をかんかふることなかれ。たた般若を尊重するかゆゑに。日日に百千兩の金を食せしむへし。天食をおくりて供養すへし。天華を散して供養すへし。日日三時に禮拜し恭敬して。さらに患惱の心を生せしむることなかれ。かくのことくすれは菩提の道かならすところあり。われ發心よりこのかた。かくのことく修行して。今日は阿耨多羅三藐三菩提をえたるなり。しかあれは若樹若石もとかましとねかひ。若田若里

一本俗男の二字無し　一本に禮字無し

もとかましともとむへし。露柱に問取し。牆壁をしても參究すへし。むかし野干を師として禮拜問法する天帝釋あり。大菩薩の稱つたはれり。依業の尊卑によらす。しかあるに不聞佛法の愚癡のたくひおもはく、はわれは大比丘なり。年少の得法を拜すへからす。われは久修練行なり。得法の晩學を拜すへからす。われは師號に署せり。師號なきを拜すへからす。われは法務司なり。得法の餘僧を拜すへからす。われは僧正司なり。得法の俗男俗女を拜すへからす。われは三賢十聖なり。得法せりとも比丘尼等を禮拜すへからす。われは帝胤なり。得法なりとも臣家相門を拜すへからすといふ。かくのことくの癡人。いたつらに父國をはなれて佗國の道路に跨蹠するにより。て。佛道を見聞せさるなり。むかし唐朝の趙州眞際大師。こころをおこして發足行脚せしちなみにいふ。たとひ七歳なりともわれよりも勝ならはわれかれにとふへし。たとひ百歳なりともわれよりも劣ならはわれかれををしふへし。七歳に問法せんとき。老漢禮拜す

へきなり。奇爽の志烈なり。古佛の心術なり。得道得法の比丘尼出世せるとき。求法參學の比丘僧。その會に投して。禮拜問法するは。參學勝躅なり。たとへは渴に飲にあふかことくなるへし。震旦國の志閑禪師は。臨濟下の尊宿なり。臨濟ちなみに師のきたるをみてとりとむるに。師いはく。領也。臨濟はなちていはく。且放倆一頓。これより臨濟の子となれり。臨濟をはなれて末山にいたるに。末山とふ。近離甚處。師いはく。路口。末山いはく。なんちなんそ蓋却しきたらさる。師無語。すなはち禮拜して師資の禮をまうく。師かへりて末山にとふ。いかならんかこれ末山。末山いはく。不露頂。師いはく。いかならんかこれ山中人。末山いはく。非男女等相。師いはく。なんちなんそ變せさる。末山いはく。これ野狐精にあらす。なにをか變せん。師禮拜す。つひに發心して圍頭をつとむること始終三年なり。のちに出世せりしとき。衆にしめしていはく。われ臨濟爺爺のところにして半杓を得しき。末山孃孃のところにして半杓を得しき。ともに一杓につくりて喫しおはりて。直至如今飽飽なり。いまこの道をききて。昔日のあとを慕古するに。末山は高安大愚の神足なり。命脈ちからありて。志閑の孃となる。臨濟は黃檗運禪師の嫡嗣なり。功夫ちからありて。志閑の爺となる。爺とはちちといふなり。孃とはははといふなり。志閑禪師の末山尼了然を禮拜求法する志烈の勝躅なり。晩學の慣節なり。擊關破節といふへし。妙信尼は仰山の弟子なり。仰山ときに廨院主を選するに。仰山あまねく勤舊前資等にとふ。たれ人かその仁なる。問答往來するに。仰山つひにいはく。信淮子これ女流なりといへとも。大丈夫の志烈あり。まさに廨院主とするにたへたり。衆みな應諾す。妙信つひに廨院主に充す。ときに仰山の會下にある龍象うらみす。まことに非細の職にあらされとも。選にあたらん自己としては自愛しつへし。充職して廨院にあるとき。蜀僧十七人ありて。黨をむすひて尋師訪道するに。仰山にのほらんとして薄暮に廨院に宿す。歇息する夜話に。曹谿高祖の風幡の話を擧す。十七人おのおの

いふことみな道不是なり。ときに廨院主かへのほかにありてききていはく。十七頭の時驢をしむへしいくはくの艸鞋をかつひやす。佛法也未夢見在。ときに行者ありて廨院主の僧を不冐するをききて。十七僧にかたるに。十七僧ともに廨院主の不冐するをうらみす。おのれか道不得をはちて。すなはち威儀を具し。燒香禮拜して請問す。廨院主いはく。近前來。十七僧近前するあゆみいまたやまさるに。廨院主いはく。不是風動。不是幡動。不是心動。かくのことく爲道するに。十七僧ともに有省なり。禮謝して師資の儀をなす。すみやかに西蜀にかへる。つひに仰山にのぼらす。まことにこれ三賢十聖のおよふところにあらす。佛祖嫡嫡の道業なり。しかあれはいまも住持およひ半座の職むなしからんときは。比丘尼の得法せらんを請すへし。比丘の高年宿老なりとも得法せさらん。なにの要かあらん。爲衆の主人。かならす明眼によるへし。しかあるに村人の身心に沈溺せらんはかたくなにして。世俗にもわらひぬへきことおほし。いはんや

位一本に法に作る

佛法にはいふにたらす。また女人およひ姉姑等の傳法の師僧を拜不冐ならんと擬するもありぬへし。これはしることなく學せさるゆゑに。畜生にはちかく。佛祖にはとほきなり。一向に佛法に身心を投せんことをふかくたくはふるこころとせるは。佛法かならす人をあはれむことあるなり。おろかなる人天なほまことを感するおもひあり。諸佛の正位いかてかまことに感應するあはれみなからん。土石沙礫にも。誠感の至神はあるなり。見在大宋國の寺院に比丘尼の掛搭せるか。もし得法の聲あれは。官家より尼寺の住持に補すへき詔をたまふには。即寺にて上堂す。住持以下衆僧みな上參して。立地聽法するに。問話も比丘僧なり。これ古來の規矩なり。得法せらんはすなはち一箇の眞箇なる古佛にてあれはむかしのたれにて相見すへからす。かれわれをみるに新條の特地に相接す。われかれをみるに今日須入今日の相待なるへし。たとへは正法眼藏を傳持せらん比丘尼は。四果支佛。およひ三賢十聖もきたりて禮拜問法せ

一本士の下に大字あり

んに。比丘尼この禮拜をうくへし。男兒なにをもてか貴ならん。虛空は虛空なり。四大は四大なり。五蘊は五蘊なり。女流もまたかくのごとし。得道はいつれも得道す。たたしいつれも得法を敬重すへし。男女を論することなかれ。これ佛道極妙の法則なり。また宋朝に居士といふは。未出家の士夫なり。菴居して夫婦そなはれるもあり。また孤獨潔白なるもあり。なほ塵勞稠林といひぬへし。しかあれともあきらむるところあるは。雲衲霞袂。あつまりて禮拜請益すること。出家の宗匠におなし。たとひ女人なりとも畜生なりとも。またしかあるへし。佛法の道理いまたゆめにもみさらんは。たとひ百歳なる老比丘なりとも。得法の男女におよふへきにあらす。うやまふへからす。たた賓主の禮のみなり。佛法を修行し。佛法を道取せんは。たとひ七歳の女流なりとも。すなはち四衆の導師なり。衆生の慈父なり。たとへは龍女成佛のことし。供養恭敬せんこと。諸佛如來にひとしかるへし。これすなはち佛道の古儀なり。しらす單傳せさらんはあは

れむへし。また和漢の古今に。帝位にして女人あり。その國土みなこの帝王の所領なり。人みなその臣となる。これは人をうやまふにあらす位をうやまふなり。比丘尼もまたその人をうやまふことは。むかしよりなし。ひとへに得法をうやまふなり。また阿羅漢となれる比丘尼のあるには。四果にしたかふ功德みなきたる。功德なほしたかふ。人天たれか四果の功德よりもすくれん。三界の諸天。みなおよふところにあらす。しかしなからすつるものとなる。諸天みなうやまふところなり。いはんや如來の正法を傳來し。菩薩の大心をおこさん。たれのうやまはさるかあらん。これをうやまはさらんはおのれかをかしなり。おのれか無上菩提をうやまはされは。謗法の愚癡なり。またわか國には。帝者のむすめ。あるひは大臣のむすめの后宮に準するあり。また皇后の院號せるあり。これらかみをそれるあり。かみをそらさるあり。しかあるに貧名愛利の比丘僧ににたる僧侶。この家門にはしるに。かうへをはきものにうたすといふことなし。

なほ主徒よりも劣なり。いはんやまた奴僕となりてとしをふるもおほし。あはれなるかな小國邊地にうまれぬるに。かくのごときの邪風ともしらさることは。天竺唐土にはいまたなし。我國のみなり。かなしむへし。あなかちに鬚髮をそりて。如來の正法をやふる。深重の罪業といふへし。これひとへに夢幻空華の世途をわするるによりて。女人の奴僕と繫縛せられたることかなしむへし。いたつらなる世途のため。なほかくのごとくす。無上菩提のため。なんそ得法のうやまふへきをうやまはさらん。これは法をおもくするこころさしあさく。法をもとむるこころさしあまねからさるゆゑなり。すてにたからをむさほるとき。女人のたからにてあれはうへからすとおもはす。法をもとめんときは。このこころさしにはすくるへし。もししかあらは艸木牆壁も正法をほとこす。天地萬法も正法をあたふるなり。かならすしるへき道理なり。眞善知識にあふといへとも。いまたこの志氣をたてて法をもとめさるときは。法水のうるほひ

からふらさるなり。審細に功夫すへし。またいま至愚のはなはたしき人おもふことは。女流は貪婬所對の境界にてありとおもふこころをあらためすしてこれをみる。佛子かくのごとくあるへからす。貪婬所對の境となりぬへしとて。いむことあらは。一切男子も。またいむへきか。染汙の因緣となることは。男も境となる。女も境緣となる。非男非女も境緣となる。夢幻空華も境緣となる。あるひは水影を緣として非梵行あることあり。あるひは天日を緣として非梵行ありき。神も境となる。鬼も境となる。その緣かそへつくすへからす。八萬四千の境界ありといふ。これみなすつへきか。みるへからさるか。律云。男二所。女三所。おなしくこれ波羅夷不共住。しかあれは婬所對の境になりぬへしとてきらはは。一切の男子と女人とたかひにあひきらふて。さらに得度の期あるへからす。この道理。子細に撿點すへし。外道も妻なきあり。妻なしといへとも。佛法にいらされは。邪見の外道なり佛弟子も在家の二衆は夫婦あり。夫婦あれとも佛弟子

なれは。人中天上にも。肩をひとしくする餘類なし」。また唐國にも愚癡僧ありて願志を立するにいはく。生生世世なかく女人をみることなからん。この願なにの法にかよる。世法によるか。佛法によるか。外道の法によるか。天魔の法によるか。女人なにのとかかある。男子なにの德かある。惡人は男子も惡人なるあり。善人は女人も善人なるあり。聞法をねかひ出離をもとむることかならす男子女人によらす。もし未斷惑のときは。男子女人おなしく未斷惑なり。斷惑證理のときは。男子女人。簡別さらにあらす。またなかく女人をみじと願せは。衆生無邊誓願度のときも女人をはすつへきか。すててはにあらす。佛慈悲といはんやたたこれ聲聞の酒にゑふことふかきによりて。醉狂の言語なり。人天これをまことと信すへからす。またむかし犯罪ありしとてきらはは。一切菩薩をもきらふへし。もしのちに犯罪ありぬへしとてきらはは。一切發心の菩薩をもきらふへし。かくのことくきらはは。一切みなすてん。なにによりてか佛法現

成せん。かくのことくのことはは。佛法をしらさる。癡人の狂言なり。かなしむへし。もしなんちか願のことくにあらは。釋尊およひ在世の諸菩薩。みな犯罪ありけるか。またなんちよりも菩提心もあさかりけるか。しつかに觀察すへし。付法藏の祖師。およひ佛在世の菩薩。この願なくは。佛法にならふへきところやあると參學すへきなり。もし汝か願のことくにあらは。女人を濟度せさるのみにあらす。得法の女人よにいてて人天のために說法せんときも。きたりてきくへからさるか。もしきたりてきかすは。菩薩にあらす。すなはち外道なり。いま大宋國をみるに。久修練行に似たる僧侶のいたつらに海沙をかそへて。生死海に流浪せるあり。女人にてあれとも參尋知識し。辨道功夫して。人天の導師にてあるあり。餅をうらす餅をすてし老婆等あり。あはれむへし男子の比丘僧にてあれとも。いたつらに教海のいさこをかそへて。佛法は夢にもいまたみさることを。おほよそ境をみてはあきらむることをならふへし。おぢてにくるとの

みならふは。小乘聲聞の教行なり。東をすてて西にかくれんとすれは。西にも境界なきにあらす。たとひにけぬるとおもふとあきらめさるにも。遠にても境なり。なほこれ解脫の分にあらす。遠境はいよいよふかかるへし。また日本國にひとつのわらひことあり。いはゆるあるひは結界の境地と稱し。あるひは大乘の道場と稱して。比丘尼女人等を來入せしめす。邪風ひさしくつたはれて人わきまふることなし。稽古の人あらためす。博達の士もかんかふることなし。あるひは權者の所爲と稱し。あるひは古先の遺風と號して。さらに論することなき。わらはは人の腸もたえぬへし。權者とはなにものそ。賢人か聖人か。神か鬼か。十聖か。三賢か。等覺か。妙覺か。またふるきをあらためさるへくは。生死流轉をはすつへからさるか。いはんや大師釋尊これ無上正等覺なり。あきらむへきはことことくあきらむ。おこなふへきはことことくこれをおこなふ。解脫すへきはみな解脫せり。いまのたれかほとりにもおよはん。しかあるに在世の佛會

に。みな比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷等の四衆あり。八部あり。三十七部あり。八萬四千部あり。みなこれ佛界を結せることあらたなる佛會なり。いつれの會か比丘尼なき。女人なき。八部なき。如來在世の佛會よりもすくれて清淨ならん結界をは。われらねかふへきにあらす。天魔界なるかゆゑに。佛會の法儀は。自界佗方三世千佛ことなることなし。ことなる法あらんは佛會にあらすとしるへし。いはゆる四果は。極位なり。大乘にても。小乘にても。極位の功德は差別せす。しかあるに比丘尼の四果を證するおほし。三界のうちにも。十方の佛土にも。いつれの界にかいたらさらん。たれかこの行履をふさくことあらん。また妙覺は。無上位なり。女人すでに作佛す。諸方いつれのものか究盡せられさらん。たれかこれをふさきていたらしめさらんと擬せん。すでに遍照於十方の功德あり。界畔いかかせん。また天女をもふさきていたらしめさるか。神女をもふさきていたらしめさる、か。天女神女も。いまた斷惑の類にあらす。なほこれ流轉の衆生な

り。犯罪あるときはあり。なきときはなし。人女畜女も。罪あるときはあり。罪なきときはなし。天のみち神のみちふさかん人はたれそ。すてに三世の佛會に參詣す。佛所に參學す。佛所佛會にことならん。たれか佛法と信受せん。たたこれ誑惑世間人の至愚なり。野干の窟穴を人にうははれさらんとをしむよりもおろかなり。また佛弟子の位は。菩薩にもあれ。たとひ聲聞にもあれ。第一比丘。第二比丘尼。第三優婆塞。第四優婆夷。かくのごとし。このくらゐ。天上人間ともにしれり。ひさしくきこえたり。しかあるを佛弟子第二の位は。轉輪聖王よりもすくれ。釋提桓因よりもすくるへし。いたらさるところあるへからす。いはんや小國邊土の國王大臣の位にならぶへきにあらす。いま比尼丘いるへからすといふ道場をみるに。田夫野人農夫樵翁みたれいる。いはんや國王。大臣。百官。宰相たれかいらさるあらん。田夫等と比丘尼と。學道を論し得位を論せんに。勝劣つひにいかん。たとひ世法にて論すとも。たとひ佛法にて論すとも。比丘尼のいたら

んところえ。田夫野人あへていたるへからす。錯亂のはなはたしき。小國はしめてこのあとをのこす。あはれむへし三界慈父の長子小國にきたりて。ふさきていたらしめさるところありき。またかの結界と稱するところにすめるやから。十惡をおそるることなし。十重つふさにをかす。たた造罪界として不造罪人をきらふか。いはんや逆罪をおもきこととす。結界の地にすめるもの。逆罪もつくりぬへし。かくのごとくの魔界はまさにやふるへし。佛化を學すへし。佛界にいるへし。まさに佛恩を報するにてあらん。かくのごとくの古先。なんち結界の旨趣をしれりやいなや。たれよりか相承せりし。たれか印をかかうふる。いはゆるこの諸佛所結の大界にいるものは。諸佛も。衆生も。大地も。虛空も。繫縛を解脫し。諸佛の妙法に歸源するなり。しかあれはすなはちこの界をひとたひふむ衆生。しかしなから佛功德をかうふるなり。不違越の功德あり。得清淨の功德あり。一方を結するとき。すなはち法界みな結せられ。一重を結するとき。法界

（一本にへにに作る）

みな結せらるるなり。あるひは水をもて結する界あり。あるひは心をもて結界することあり。あるひは空をもて結界することあり。かならず相承相傳ありて。しるへきことあり。いはんや結界のとき。灑甘露ののち。歸命の禮をはり。乃至淨界等ののち。頌云。茲界遍法界。無爲結清淨。この旨趣。いまひころ結界と稱する古先老人。しれりやいなや。おもふになんたち結の中に遍法界の結せらるることとしるへからさるなり。しりぬなんち聲聞の酒にゑふて小界を大界とおもふなり。ねかはくはひころの迷醉すみやかにさめて。諸佛の大界の遍界に違越すへからす。濟度攝受に。一切衆生みな化をかうふらん功德を禮拜恭敬すへし。たれかこれを得道髓といはさらん。

正法眼藏禮拜得髓

延應庚子淸明日記觀音導利興聖寺林寺

正法眼藏谿聲山色

（福本殼の下に を無し）

（無福本に豈に作る）

阿耨菩提に。傳道受業の佛祖おほし。粉骨の先蹤卽不無なり。斷臂の祖宗まなふへし。掩泥の毫髮もたかふることなかれ。各各の脫殼をうるに。從來の知見解會に拘牽せられす。曠劫未明の事たちまちに現前す。恁麼時の而今は。吾も不知なり。誰も不識なり。汝も不期なり。佛眼も覷不見なり。人慮あに測度せんや。

大宋國に東坡居士蘇軾とてありしは。字は子瞻といふ。筆海の眞龍なりぬへし。佛海の龍象を學す。重淵にも游泳す。層雲にも昇降す。あるとき廬山にいたりしちなみに。溪水の夜流する聲をきくに悟道す。偈をつくりて常總禪師に呈するにいはく。谿聲便是廣長舌。山色無非淸淨身。夜來八萬四千偈。他日如何擧似人。この偈を總禪師に呈するに。總禪師然之す。總は。照覺常總禪師なり。總は。黃龍慧南禪師の法嗣なり。南は。慈明楚圓禪師の法嗣なり。居士あるとき佛印禪師了元和尙と相見するに。佛印さつくるに。法衣佛戒等をもてす。居士つ

ねに法衣を搭して修道しき。居士佛印にたてまつるに無價の玉帶をもてす。ときの人いはく凡俗所及の儀にあらすと」。しかあれは聞谿悟道の因緣。さらにこれ晩流の潤益なからんや。あはれむへしいく。めくりか現身說法の化儀にもれたるかことくなる。なにとしてかさらに山色をみ谿聲をきく。一句なりとやせん。半句なりとやせん。八萬四千偈なりとやせん。うらむへし山水にかくれたる聲色あること。またよろこふへし山水にあらはるる時節因緣あること。舌相も懈倦なし。身色あに存沒あらんや。しかあれともあらはるるときをやちかしとならふ。かくれたるときをやちかしとならはん。一枚なりとやせん。半枚なりとやせん。從來の春秋は山水を見聞せさりけり。夜來の時節は山水を見聞することわつかなり。いま學道の菩薩も山流水不流より學入の門を開すへし。この居士の悟道せし夜は。そのさきの日。總禪師と無情說法話を參問せしなり。禪師の言下に。翻身の儀いまたしといへとも。谿聲のきこゆるところは。逆水

つねに一本に一つねに作る

福本に無の居士上のに二字あり

の波浪たかく天をうつものなり。しかあれはいま谿聲の居士をおとろかす。谿聲なりとやせん。照覺の流瀉なりとやせん。うたかふらくは照覺の無情說法の語。ひきいまたやまず。ひそかに谿流のよるの聲にみたれいる。たれかこれ一升なりと辨肯せん。一海なりと朝宗せん。畢竟していはは居士の悟道するか。山水の悟道するか。たれの明眼あらんか。長舌相清淨身を急著眼せさらん」。また香嚴智閑禪師。かつて大潙大圓禪師の會に學道せしとき。大潙いはく。なんち聰明博解なり。章疏のなかより記持せす。父母未生以前にあたりて。わかために一句を道取しきたるへし。香嚴いはんことをもとむること數番すれとも不得なり。ふかく身心をうらみ。年來たくはふるところの書籍を披尋するに。なほ茫然なり。つひに火をもちて年來のあつむる書をやきていはく。畫にかけるもちひはうゑをふさくにたらす。われちかふ此生に佛法を會せんことをのそまし。たた行粥飯僧とならんといひて。行粥飯して年月をふるなり。行粥飯僧と

福本に無法の下字あり

無無しの語は話に作り升は作る

役清本促に作る

いふは。衆僧に粥飯を行益するなり。このくにの陪饌役送のごとき
なり。かくのごとくして大潙にまうす。智閑は身心昏昧にして道不
得なり。和尚わかためにいふへし。大潙のいはく。われなんちかため
にいはんことを辞せず。おそらくはのちになんちわれをうらみん。
かくて年月をふるに。大證國師の蹤跡をたつねて。武當山にいりて。
國師の菴のあとに。くさをむすひて爲菴す。竹をうゑてともとしけ
り。あるとき道路を併淨するちなみに。かはらほとはしりて竹にあ
たりてひひきをなすをきくに。豁然として大悟す。沐浴し潔齋して。
大潙山にむかひて燒香禮拜して。大潙にむかひてまうす。大潙大和
尚。むかしわかためにとくことあらは。いかてかいまこの事あらん。
恩のふかきこと父母よりもすくれたり。つひに偈をつくりていは
く。一擊亡所知。更不自修治。動容揚古路。不墮悄然機。處處無蹤跡。聲色
外威儀。諸方達道者。咸言上上機。この偈を大潙に呈す。大潙いはく。此
子徹也。また靈雲志勤禪師は。三十年の辨道なり。あるとき遊山する

福本岑の上景字有り

に。山脚に休息して。はるかに人里を望見す。ときに春なり。桃華のさ
かりなるをみて。忽然として悟道す。偈をつくりて大潙に呈するに
いはく。三十年來尋劍客。幾回葉落又抽枝。自從一見桃華後。直至如今
更不疑。大潙いはく。從緣入者。永不退失。すなはち許可するなり。いつ
れの入者か從緣せさらん。いつれの入者か退失あらん。ひとり勤を
いふにあらす。つひに大潙に嗣法す。山色の清淨身にあらさらん。い
かてか恁麼ならん。長沙岑禪師にある僧とふ。いかにしてか山河大
地を轉して自己に歸せしめん。師いはく。いかにしてか自己を轉し
て山河大地に歸せしめん。いまの道取は。自己のおのつから自己に
てある。自己たとひ山河大地といふとも。さらに所歸に罣礙すへき
にあらす。鄧鄧の廣照大師慧覺和尚は。南嶽の遠孫なり。あるとき教
家の講師子璿とふ。清淨本然云何忽生山河大地。かくのごとくとふ
に。和尚しめすにいはく。清淨本然云何忽生山河大地。ここにしりぬ
清淨本然なる山河大地を。山河大地とあやまるへきにあらす。しか

あるを經師かつてゆめにもきかされは。山河大地を山河大地としらさるなり」。しるへし山色谿聲にあらされは。拈華も開演せす。得髓も依位せさるへし。谿聲山色の功德によりて。大地有情同時成道し。見明星悟道する諸佛あるなり。かくのことくなる皮袋。これ求法の志氣甚深なりし先哲なり。その先蹤。いまの人かならす參取すへし。いまも名利にかかはらさらん。眞實の參學は。かくのことき志氣をたつへきなり。遠方の近來は。まことに佛法を求覓する人まれなり。なきにはあらす難遇なるなり。たまたま出家兒となり離俗せるにたるも。佛道をもて名利のかけはしとするのみおほし。あはれむへしかなしむへし。この光陰ををします。むなしく黑暗業に賣買すること。いつれのときかこれ出離得道の期ならん。たとひ正師にあふとも。眞龍を愛せさらん。かくのことくのたくひ。先佛これを可憐憫者といふ。その先世に惡因あるによりてしかあるなり。生をうくるに爲法求法のこころさしなきによりて。眞法をみるとき眞龍

一本情の下に更に字のあとり

をあやしみ。正法にあふとき正法にいとはるるなり。この身心骨肉かつて從法而生ならさるによりて。法と不相應なり。法と不受用なり。祖宗師資。かくのことく相承してひさしくなりぬ。菩提心はむかしのゆめをとくかことしあはれむへし。審山にうまれなから審財をしらす。審財をみす。いはんや法財をえんや。もし菩提心をおこしてのち。六趣四生に輪轉すといへとも。その輪轉の因緣。みな菩提の行願となるなり。しかあれは從來の光陰はたとひむなしくすこすといふとも。今生のいまたすきさるあひたに。いそきて發願すへし。ねかはくはわれと一切衆生と。今生より乃至生生をつくして。正法をきくことあらん。きくことあらんとき正法を疑著せじ。不信なるへからす。まさに正法にあはんとき。世法をすてて。佛法を受持せん。つひに大地有情。ともに成道することをえん。かくのことく發願せは。おのつから正發心の因緣ならん。この心術懈倦することなかれ。またこの日本國は。海外の遠方なり。人のこころ至愚なり。むかしよ

本と下とのにの字あり

りいまた聖人うまれす。生知うまれす。いはんや學道の實士まれなり。道心をしらさるともからに。道心ををしふるときは。忠言の逆耳するによりて。自己をかへりみす。佗人をうらむ。おほよそ菩提心の行願には。菩提心の發未發。行道不行道を。世人にしられんことをおもはさるへし。しられさらんといとなむへし。いはんやみつから口稱せんや。いまの人は實をもとむることまれなるによりて身に行なく。こころにさとりなくとも。佗人のほむることありて。行解相應せりといはん人をもとむるかことし。迷中又迷。すなはちこれなり。この邪念すみやかに抛捨すへし。學道のとき。見聞することかたきは。正法の心術なり。その心術は。佛佛相傳しきたれるものなり。これを佛光明とも。佛心とも相傳するなり。如來在世より。今日にいたるまて。名利をもとむるを學道の用心とするにたるともからおほかり。しかありしも正師のをしへにあひて。ひるかへして正法をもとむれは。おのつから得道す。いま學道には。かくのことくのやまふ

いはんや福本には作るくにに

のあらんとしるへきなり。たとへは初心始學にもあれ。久修練行にもあれ。傳道授業の機をうることもあり。機をえさることもあり。慕古してならふ機あるへし。訕謗してならはさる魔もあらん。兩頭ともに愛すへからす。うらむへからす。いかにしてかうれへなからんうらみさらん。いはく。三毒を三毒としれるともからまれなるによりて。うらみさるなり。いはんやはしめて佛道を欣求せしときのこころさしをわすれさるへし。いはく。はしめて發心するときは。佗人のために法をもとめす。名利をなけすてきたる。名利をもとむるにあらす。たたひとすちに得道をこころさす。かつて國王大臣の恭敬供養をまつこと期せさるものなり。しかあるにいまかくのことくの因緣あり。本期にあらす。人天の繫縛にかかはらんことを期せさるところなり。しかあるをおろかなる人はたとひ道心ありといへともはやく本志をわすれて。あやまりて人天の供養をまちて。佛法の功德いたれりとよろこふ。國王大臣の歸依しきり

（一本あぬに作る）

なれば。わかみちの現成とおもへり。これは學道の一魔なり。あはれむこころをわするへからすといふとも。よろこふことなかるへし。みすや。ほとけのたまはく。如來現在猶多怨嫉の金言あることを。愚の賢をしらす。小畜の大聖をあたむこと理かくのことし」。また西天の祖師おほく外道二乘國王等のためにやふられたるを。これ外道のすくれたるにあらす。祖師に遠慮なきにあらす。初祖西來よりのち。嵩山に掛錫するに。梁武もしらす。魏主もしらす。ときに兩箇のいぬあり。いはゆる菩提流支三藏と光統律師となり。虛名邪利の正人にふさかれんことをおそりて。あふきて天日をくらまさんと擬するかことくなりき。在世の達多よりもなほはなはたし。あはれむへしなんちが深愛する名利は。祖師これを糞穢よりもいとふなり。かくのことくの道理。佛法の力量の究竟せさるにはあらす。良人をほゆるいぬありとしるへし。ほゆるいぬをわつらふことなかれうらむることなかれ。引導の發願すへし。汝是畜生發菩提心と施設すへし。先哲いはく。これはこれ人面の畜生なり。また歸依供養する魔類もあるへきなり。前佛いはく。不親近國王。王子。大臣。官長。婆羅門。居士。まことに佛道を學習せん人。わすれさるへき行儀なり。菩薩初學の功德すすむにしたかふてかさなるへし」。またむかしより天帝きたりて行者の志氣を試驗し。あるひは魔波旬きたりて。行者の修道をさまたくることあり。これみな名利の志氣はなれさるときこの事ありき。大慈大悲のふかく。廣度衆生の願の老大なるには。これらの障礙あらさるなり。修行の力量。おのつから國土をうることあり。世運の達せるに相似せることあり。かくのことくの時節。さらにかれを辨冐すへきなり。かれに瞌睡することなかれ。愚人これをよろこふ。たとへは癡犬の枯骨をねふるかことし賢聖これをいとふ。たとへは世人の糞穢をおつるにたり。おほよそ初心の情量は。佛道をはからふことあたはす。測量すといへとも。あたらさるなり。初心に測量せすといへとも。究竟に究盡なきにあらす。徹地の菩薩は。初

心の淡識にあらす。たたまさに先聖の道をふまんことを行履すへし。このとき尋師訪道するに。梯山航海あるなり。導師をたつね知識をねかふには。從天降下なり。從地涌出なり。その接渠のところに有情に道取せしめ。無情に道取せしむるに。身處にきき心處にきく。若將耳聽は。家常の茶飯なりといへとも。眼處聞聲これ何必不必なり。見佛にも。自佛佗佛をも。み。大佛小佛をみる。大佛にもおとろきおそれされ。小佛にもあやしみわつらはされ。いはゆる大佛小佛をしはらく山色谿聲と認するものなり。これに廣長舌あり。八萬偈あり。擧似迥脫なり。見徹獨拔なり。このゆゑに。俗いはく。彌高彌堅なり。先佛いはく。彌天彌綸なり。春松の操あり。秋菊の秀ある。卽是なるのみなり。善知識この田地にいたらんとき。人天の大師なるへし。いまたこの田地にいたらす。みたりに爲人の儀を存せん。人天の大賊なり。春松しらす。秋菊みさらん。なにの艸料かあらん。いかか根源を截斷せん。また心も肉も。懈怠にもあり。不信にもあらんには。誠心をもはら

福本從の下はの無上しの下しなのをの作るしるに出にりす下るあり

福本自上無しのみしの一もの無上本上無

福本万に下千四の字あのり二

大師福本導師に作る

して前佛に懺悔すへし。恁麼するとき前佛懺悔の功德力。われをすくひて清淨ならしむ。この功德。よく無礙の淨信精進を生長せしむるなり。淨信一現するとき。自佗おなしく轉せらるるなり。その利益あまねく情非情にかうふらしむ。その大旨は。ねかはくはわれたとひ過去の惡業おほくかさなりて。障道の因緣ありとも。佛道によりて得道せしし。諸佛諸祖。われをあはれみて。業累を解脫せしめ。學道さはりなからしめ。その功德法門。あまねく無盡法界に充滿彌綸せらん。あはれみをわれに分布すへし。佛祖の往昔は。吾等なり。吾等かは當來は。佛祖ならん。佛祖を仰觀すれは。一佛祖なり。發心を觀想するにも。一發心なるへし。あはれみを七通八達せんに。得便宜なり。落便宜なり」。このゆゑに龍牙のいはく。昔生未了今須了。此生度取累生身。古佛未悟同今者。悟了今人卽古人。しつかにこの因緣を參究すへし。これ證佛の承當なり。かくのことく懺悔すれは。かならす佛祖の冥助あるなり。心念身儀發露白佛すへし。發露のちから。罪根をして銷

一本佛の下にの字にあり

布一本八に作る